

昭和十三年七月

開放地及治外法權ニ關スル日支間現行
條約關係概説

一九九

6 1.1.1.0 - 27 3824

8585 1.1.1.1 a 605

REEL No. A-0272

アジア歴史資料センター

辭條關聯辭錄
關對銀其前英者辭ニ關スル日支間裏行

部麻十三半寸尺

序

本稿ハ支那ニ於ケル開放地及治外法權問題ニ關スル我國今後ノ
對策攻究ノ一準備資料トシテ起草シタルモノニシテ右對策ニ付
テノ意見ハ之ヲ別稿ニ讓ルコトトセリ。尙開放地中租界ノ特別ナ
ル法律關係ニ付テハ別ニ論述スルコトトセリ。

一	官廳官廳ノ增加	一七
二	官廳官廳ノ減少	二七
三	官廳官廳ノ維持	三六
四	官廳官廳ノ改革	四六
五	官廳官廳ノ整理	五五
六	官廳官廳ノ刷新	六四
七	官廳官廳ノ更新	七三
八	官廳官廳ノ改造	八二
九	官廳官廳ノ改良	九一
十	官廳官廳ノ改善	一〇〇
十一	官廳官廳ノ修飾	一〇九
十二	官廳官廳ノ修補	一一八
十三	官廳官廳ノ修葺	一二七
十四	官廳官廳ノ修造	一三六
十五	官廳官廳ノ修築	一四五
十六	官廳官廳ノ修繕	一五四
十七	官廳官廳ノ修葺	一六三
十八	官廳官廳ノ修造	一七二
十九	官廳官廳ノ修築	一八一
二十	官廳官廳ノ修繕	一九〇
二十一	官廳官廳ノ修葺	一九九
二十二	官廳官廳ノ修造	二〇八
二十三	官廳官廳ノ修築	二一七
二十四	官廳官廳ノ修繕	二二六
二十五	官廳官廳ノ修葺	二三五
二十六	官廳官廳ノ修造	二四四
二十七	官廳官廳ノ修築	二五三
二十八	官廳官廳ノ修繕	二六二
二十九	官廳官廳ノ修葺	二七一
三十	官廳官廳ノ修造	二八〇
三十一	官廳官廳ノ修築	二八九
三十二	官廳官廳ノ修繕	三〇八
三十三	官廳官廳ノ修葺	三一七
三十四	官廳官廳ノ修造	三二六
三十五	官廳官廳ノ修築	三三五
三十六	官廳官廳ノ修繕	三四四
三十七	官廳官廳ノ修葺	三五三
三十八	官廳官廳ノ修造	三六二
三十九	官廳官廳ノ修築	三七一
四十	官廳官廳ノ修繕	三八〇
四十一	官廳官廳ノ修葺	三八九
四十二	官廳官廳ノ修造	三九八
四十三	官廳官廳ノ修築	四〇七
四十四	官廳官廳ノ修繕	四一六
四十五	官廳官廳ノ修葺	四二五
四十六	官廳官廳ノ修造	四三四
四十七	官廳官廳ノ修築	四四三
四十八	官廳官廳ノ修繕	四五二
四十九	官廳官廳ノ修葺	四六一
五十	官廳官廳ノ修造	四七〇
五十一	官廳官廳ノ修築	四七九
五十二	官廳官廳ノ修繕	四八八
五十三	官廳官廳ノ修葺	四九七
五十四	官廳官廳ノ修造	五〇六
五十五	官廳官廳ノ修築	五一五
五十六	官廳官廳ノ修繕	五二四
五十七	官廳官廳ノ修葺	五三三
五十八	官廳官廳ノ修造	五四二
五十九	官廳官廳ノ修築	五五一
六十	官廳官廳ノ修繕	五六〇
六十一	官廳官廳ノ修葺	五六九
六十二	官廳官廳ノ修造	五七八
六十三	官廳官廳ノ修築	五八七
六十四	官廳官廳ノ修繕	五九六
六十五	官廳官廳ノ修葺	六〇五
六十六	官廳官廳ノ修造	六一四
六十七	官廳官廳ノ修築	六二三
六十八	官廳官廳ノ修繕	六三二
六十九	官廳官廳ノ修葺	六四一
七十	官廳官廳ノ修造	六五〇
七十一	官廳官廳ノ修築	六五九
七十二	官廳官廳ノ修繕	六六八
七十三	官廳官廳ノ修葺	六七七
七十四	官廳官廳ノ修造	六八六
七十五	官廳官廳ノ修築	六九五
七十六	官廳官廳ノ修繕	六〇四
七十七	官廳官廳ノ修葺	六一三
七十八	官廳官廳ノ修造	六二二
七十九	官廳官廳ノ修築	六三一
八十	官廳官廳ノ修繕	六四〇
八十一	官廳官廳ノ修葺	六四九
八十二	官廳官廳ノ修造	六五八
八十三	官廳官廳ノ修築	六六七
八十四	官廳官廳ノ修繕	六七六
八十五	官廳官廳ノ修葺	六八五
八十六	官廳官廳ノ修造	六九四
八十七	官廳官廳ノ修築	七〇三
八十八	官廳官廳ノ修繕	七一二
八十九	官廳官廳ノ修葺	七二一
九十	官廳官廳ノ修造	七三〇
九十一	官廳官廳ノ修築	七三九
九十二	官廳官廳ノ修繕	七四八
九十三	官廳官廳ノ修葺	七五七
九十四	官廳官廳ノ修造	七六六
九十五	官廳官廳ノ修築	七七五
九十六	官廳官廳ノ修繕	七八四
九十七	官廳官廳ノ修葺	七九三
九十八	官廳官廳ノ修造	八〇二
九十九	官廳官廳ノ修築	八一一
一百	官廳官廳ノ修繕	八二〇

S 1.1.1.0 - 27 3825
303

1935 1.1.1.0 - 27 a
606

REEL No. A-0272

本書は支那の歴史を論ずるに際して、限られた資料を基として、その歴史を論ずる。支那の歴史は、その長い歴史の中で、多くの出来事を経験してきた。本書は、その歴史を論ずるに際して、限られた資料を基として、その歴史を論ずる。支那の歴史は、その長い歴史の中で、多くの出来事を経験してきた。本書は、その歴史を論ずるに際して、限られた資料を基として、その歴史を論ずる。支那の歴史は、その長い歴史の中で、多くの出来事を経験してきた。

目次

第一章 開放地ニ關スル日支間條約關係 一三

第二節 總論 一三

一 緒言 一三

二 阿片戰爭ノ前後 一三

三 南京條約ニ依ル五港ノ開放 一三

四 望厦條約及黃埔條約ノ締結 一三

五 白國及瑞典諾威王國トノ條約締結 一四

六 天津條約ノ締結 一四

七 北京條約ノ締結 一五

八 英米佛露以外ノ諸國トノ條約ノ締結 一六

九 阿片條約ノ締結 一七

一〇 開放地ノ増加 一七

一一 自開商埠地ノ設定 一七

S 1:1.1.0-27 3826

607

REEL No. A-0272

104

- 一二 租界設定の理由..... 一二七
- 一三 北京議定書..... 一二八
- 一四 南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約..... 一二九
- 一五 英外國人ノ内地旅行權其ノ他..... 一二九
- 第三節 開放地ニ關スル日支間條約關係ノ推移..... 一三〇
- 一 修好條規及附屬通商章程ノ規定..... 一三〇
- 二 購和條約ノ規定..... 一三一
- 三 通商航海條約ノ規定..... 一三一
- 四 北京議定書ノ規定..... 一三三
- 五 各地居留地取極書..... 一三三
- 六 追加通商航海條約ノ規定..... 一三五
- 第七節 滿洲ニ關スル條約附屬協定ノ規定..... 一二六
- 一六 間島協約ノ規定..... 一二七
- 九 山東省ニ關スル條約ノ規定..... 一二七
- 一〇 南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約ノ規定..... 一二七

608

105

- 一一 膠州灣租借地ニ關スル交換公文..... 一二九
- 一二 山東懸案解決ニ關スル條約ノ規定..... 一三九
- 第三節 開放地ノ地位..... 一三〇
- 一 緒言..... 一三〇
- 二 條約ノ自開商埠地..... 一三〇
- 三 最惠國約款..... 一三一
- 四 開放地ノ内地ノ比較..... 一三一
- 五 開放地ニ於ケル居住權及業務權..... 一三三
- 六 立寄港制度及内地水路航行權..... 一三四
- 七 基督教宣教師ノ特殊地位..... 一三五
- 八 開放地及内地ノ往來權..... 一三六
- 九 開放地ニ於ケル土地及家屋ニ關スル權利..... 一三六
- 一〇 開放地ニ於ケル業務權ノ範圍..... 一三七
- 一一 開放地ニ於ケル領事駐在權..... 一三七
- 第三節 治外法權ニ關スル日支間條約關係..... 一三八

S 1.1.1.0 - 27 3827

第二節 支那國ニ於ケル治外法權制度ノ沿革

一 緒言 一三八

二 南京條約ノ締結 一三八

三 虎門追加條約附屬章程 一三九

四 望厦條約及黃埔條約ノ締結 一四〇

五 治外法權制度ノ最初ノ基礎 一四一

六 白國及瑞典諾威王國トノ條約ノ締結 一四五

七 天津條約ノ締結 一四五

八 英米佛以外ノ諸國トノ條約ノ締結 一四六

九 會審制度ノ創設 一四七

一〇 芝罘條約ノ締結 一四八

一一 列國トノ條約 一四八

一二 領事裁判權以外ノ治外法權ノ根據 一五〇

一三 領事裁判權ニ關スル日支間條約關係ノ變遷 一五二

一四 條約ノ規定 一五三

一 媾和條約ノ規定 一五四

二 通商航海條約ノ規定 一五五

三 南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ノ規定 一五七

四 現存條約ノ規定 一五八

第五節 治外法權ニ關スル日支間條約關係ノ現狀

第一款 緒言 一五九

一 考察ノ方法 一五九

二 最惠國約款 一五九

第二款 領事裁判權

一 片務的領事裁判制度 一六〇

二 領事裁判權ノ內容 一六一

三 領事裁判權ノ適用範圍 一六二

四 領事裁判機關之組織權限及裁判ノ準則 一六三

五 領事裁判制度ニ關スル我國内法令 一六四

二〇八

- 六 我現行制度ニ於ケル領事裁判機關ノ構成……………一六四
- 七 我現行制度上ニ於ケル領事裁判機關ノ權限……………一六五
- 八 我現行制度上ニ於ケル領事裁判所ノ管轄……………一六六
- 九 我現行制度上ニ於ケル領事裁判ニ對スル上訴管轄裁判所……………一六七
- 二〇 我現行制度上ニ於ケル領事裁判ノ適用法令……………一六七

第三款 會審及觀審制度……………一六八

- 一 日本專管居留地取極書ノ規定……………一六八
- 二 英米佛上ノ條約ノ規定……………一七三
- 三 上海ニ於ケル會審制度ノ發達……………一七三
- 四 會審及觀審制度ノ現狀……………一八〇

第四款 領事裁判權以外ノ治外法權ノ內容……………一八〇

- 一 前治外法權ノ範圍……………一八〇
- 二 廣義ノ治外法權ノ根據……………一八〇
- 三 課税ニ關スル特權……………一八三
- 四 警察權ニ關スル特權……………一八三

- 五 治外法權ノ限界……………一八三
- 六 治外法權地域ニ於ケル我國ノ屬人ノ行政權……………一八三

第四節 支那國ニ於ケル治外法權撤廢問題ノ經緯……………一八四

- 一 治外法權撤廢ノ條約上ノ豫約……………一八四
- 二 獨、澳、蘇ノ治外法權ノ喪失……………一八五
- 三 巴里平和會議及華府會議ニ於ケル治外法權問題……………一八五
- 四 國民政府ノ治外法權撤廢運動……………一八六
- 五 治外法權撤廢問題ニ對スル我國ノ態度……………一八七

S 1.1.1.0 - 27 3829
01010

2885 12-0-11-1 a
610

105

第一章 開放地ニ關スル日支間條約關係

第一節 總論

一 支那國ニ於テハ外國人ノ居住及營業ニ關シ他ノ一般文明國ニ於ケルト異ナリ非常ナル場所ノ制限ヲ受ケルモノナリ。即チ支那國ニ於テハ外國人ガ居住及營業ヲ爲シ得ルハ原則トシテ支那國ガ條約其ノ他ニ依リ外國人ノ居住及營業ノ爲テ開放シタル特定ノ場所即チ所謂開放地ニ限ラルモノニシテ其ノ他ノ一般ノ場所即チ所謂内地ニ於テハ外國人ハ原則トシテ居住及營業ノ自由ヲ有セザルモノトス。註100. The Position of China Under the Existing Treaties and Proposals.

二 支那國ニ於テハ所謂不平等條約國人ヲ含ム外國人ハ他ノ一般文明國ニ於ケルト異リ居住及營業ニ關シ一面ニ於テ非常ナル場所ノ制限ヲ受ケルモノナリ。即チ支那國ニ於テハ外國人ノ所謂不平等條約國人ハ治外法權其ノ他異常ナル特權ヲ享有スルモノトス。

三 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註101. 支那ノ開港場。

四 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註102. 支那ノ開港場。

五 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註103. 支那ノ開港場。

六 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註104. 支那ノ開港場。

七 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註105. 支那ノ開港場。

八 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註106. 支那ノ開港場。

九 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註107. 支那ノ開港場。

十 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註108. 支那ノ開港場。

第一章 開放地ニ關スル日支間條約關係

第一節 總論

一 支那國ニ於テハ外國人ノ居住及營業ニ關シ他ノ一般文明國ニ於ケルト異ナリ非常ナル場所ノ制限ヲ受ケルモノナリ。即チ支那國ニ於テハ外國人ガ居住及營業ヲ爲シ得ルハ原則トシテ支那國ガ條約其ノ他ニ依リ外國人ノ居住及營業ノ爲テ開放シタル特定ノ場所即チ所謂開放地ニ限ラルモノニシテ其ノ他ノ一般ノ場所即チ所謂内地ニ於テハ外國人ハ原則トシテ居住及營業ノ自由ヲ有セザルモノトス。註100. The Position of China Under the Existing Treaties and Proposals.

二 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註101. 支那ノ開港場。

三 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。註102. 支那ノ開港場。

(註100) 支那國ニ於テハ所謂不平等條約國人ヲ含ム外國人ハ他ノ一般文明國ニ於ケルト異リ居住及營業ニ關シ一面ニ於テ非常ナル場所ノ制限ヲ受ケルモノナリ。即チ支那國ニ於テハ外國人ノ所謂不平等條約國人ハ治外法權其ノ他異常ナル特權ヲ享有スルモノトス。

(註101) 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。

(註102) 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。

(註103) 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。

(註104) 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。

(註105) 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。

(註106) 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。

(註107) 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。

(註108) 支那國ニ於ケル外國人ノ居住及營業ニ關スル法律關係ニ付其ノ詳細ナル沿革的研究ヲ試ムルコトハ本稿ノ主目的トスル所ニアラザルヲ以テ茲ニハ阿片戰爭前ノ所謂無條約時代ニ關シテハ多ク觸レズ主トシテ阿片戰爭後ノ事實ニ付略述ス。

S 1.1.1.0 - 27 3830

0988 78-0.1.1.1 2
611

外國人之來航貿易ニ對シテ其ノ東洋ニ加テ又清朝ノ時代ニ入りテ最初ニ廣ク外國貿易ヲ認メタルトモ後ニ至
 外國人之居住貿易ニ對シテ其ノ制限ヲ加フルニ至リ乾隆二十二年(西曆千七百五十七年)ニハ勅諭ヲ以テ廣東以外ノ一切
 之港ノ外國貿易ニ對シテ之ヲ閉鎖セリ。廣東貿易ニ於テ外國人之商館(Consulate)ノ設置ヲ禁外西兩河岸ノ一小區域内ニ限リ
 且外國人ノ取引ニ從事シ得ル支那商人ヲ行(Along)ト稱スル特許商人團ニ限リ又外國貿易ヲ管理スル爲メ外國人ノ所
 屬ノHoppoナル支那ニ於テ最モ役得多キ專官ヲ設置シタルニ由リ是上有名ナル所ナリ。
 (註三) 支那國ハ阿片戰爭前既ニ露國トノ間ニ尼布楚條約(西曆千六百八十九年) 恰克圖條約(西曆千七百二十七年) 及恰克
 圖追加條約(西曆千七百六十八年) 三條約ヲ締結セリ。而シテ右露支間條約ハ何レモ國境問題ヲ定ムル事ヲ主目的トシ
 且同時ニ通商交易ニ關シ若干ノ規定ヲ設ケタリ。其ノ中ニハ俄國ノ領土ニ對シテ外國人ノ居住ヲ禁ズル事ヲ定メタル
 (註四) 五港ノ開放ハ香港ノ割讓ト共ニ英國政府が南東亞細亞ニ於テ最モ重要ナル點ナリキ。治外法權ニ關スル事項モ英
 國政府ハ最初ノ交渉中ニハ存シタルモ右治外法權事項ハ五港ノ開放及香港ノ割讓ニ比シテ第二次的ニ取扱ハレ遂ニ南京條約
 中ニハ規定ヲ行ハレ至リテ第二章第一節參照)。
 前記南京條約締結ノ翌年即チ西曆千八百四十三年十月八日虎門ニ於テ署名セラレタル英支間追加條
 約ノ附屬通商章程ニ於テ廣東・福州・廈門・寧波及上海ノ五港ニ於ケル通商ニ關シテ詳細ナル規定ヲ
 設ケルト共ニ右追加條約ニ於テ右五港以外ノ場所ニ於ケル貿易ヲ禁止スル旨ノ規定ヲ特ニ設ケタ
 リ(註五)。

them to carry on their mercantile transactions with whatever persons they please.

(註五) 虎門追加條約第四條ニ於テ After the Five Ports of Canton, Fuchow, Amoy, Ningpo and Shanghai shall
 be thrown open, English Merchants shall be allowed to trade only at these Five Ports. Neither shall they
 repair to any other Ports or Places, nor will the Chinese people at any other Ports or Places be permitted
 to trade with them. If English Merchant Vessels shall in contravention of this Agreement and of a Procla-
 mation to the same purport to be issued by the British Plenipotentiary, repair to any other Ports or Places,
 the Chinese Government Officers shall be at liberty to seize and confiscate both Vessels and Cargoes, and should
 Chinese People be discovered clandestinely dealing with English Merchants at any other Ports or Places, they
 shall be punished by the Chinese Government in such manner as the Law may direct. 規定ニシテ。

四 英支間南京條約ニ依ル前記五港ノ開放ハ支那ニ於テ所謂條約港ナルモノノ認メラレタル最初ノ事
 例ニシテ開放地沿革史止特筆大書セラレルベキモノナルガ米國及佛國モ亦右英國ノ例ニ倣ヒ夫々西曆

1.1.1.0 - 27 3831

1.1.1.1 a 612

千八百四十四年七月三日ノ望厦條約及西曆千八百四十四年十月二十四日ノ黃埔條約ニ於テ前記五港

ノ開放ヲ約セシメタリ。(註六)

(註六) 米支間望厦條約第三條及第十五條、佛支間黃埔條約第二條及第九條參照。

五 白國ハ英米佛三國ノ例ニ倣ヒ支那國トノ間ニ通商條約ヲ締結セントシテ印度支那駐在總領事
Lannoyヲ廣東ニ派シ交渉セシメタル處正式條約ノ締結ヲ見ルニ至ラザリシモ交渉ノ任ニ當レル兩
廣總督及廣東副督憲黃ヨリLannoyニ宛テタル千八百四十五年七月二十五日附公信ヲ以テ諸國ト
ノ條約ニ準據シテ通商ヲ爲スコトヲ認メラレタリ。從テ前記五港ノ開放ハ白國ニ對スル關係ニ於テ
モ認メラルルニ至リタリ。

瑞典諾威聯合王國ガ西曆千八百四十七年三月二十日支那國トノ間ニ締結シタル修好通商條約ハ米支
間望厦條約ヲ模範トシタルモノニシテ前記五港ノ開放ニ關シテモ望厦條約ノ規定ト同趣旨ノ規定ヲ
設ケタリ。(第三條第十五條等參照)。

六 前後二回ニ亘ル英佛聯合戰爭ノ結果支那國ハ新條約ノ締結ヲ餘儀ナクセラレタリ。

第一次英佛聯合戰爭ノ結果締結セラレタル西曆千八百五十八年六月二十六日ノ英支間天津條約ニ於
テハ南京條約ニ於テ開放セラレタル廣東、廈門、福州、寧波及上海ノ五港ニ加フルニ牛莊、登州、
臺灣、潮州及瓊州ノ開放ヲ認メ(第十一條)又長江(揚子江)ニ於ケル貿易權ニ關シ規定ヲ設ケタ

リ(第十條)(註七)。

(註七) 長江ニ於ケル貿易權ニ關シ英支間天津條約第十條ノ規定ヲ如シ。

British merchant ships shall have authority to trade upon the Great River (Yangtze), the Upper and Lower
Valley of the River being, however, disturbed by outbreaks no host shall be for the present opened to trade,
with the exception of Chinkiang, which shall be opened in a year from the date of the signing of this Treaty.
So soon as Peace shall have been restored, British Vessels shall also be admitted to trade at such Ports as
far as Hankow, not exceeding three in number, as the British Minister, after consultation with the Chinese
Secretary of State, may determine shall be Ports of Entry and Discharge.

西曆千八百五十八年六月十八日ノ米支間天津條約ニ於テ合衆國人民ハ廣州、潮州、廈門、福州、臺
灣、寧波、上海及其他他國又ハ合衆國トノ條約ニ依リ開放セラレベキ港又ハ場所ニ於テ居住
ハ貿易ヲ爲シ得ベキ旨ヲ規定シタリ(第十四條)。

西曆千八百五十八年六月二十七日ノ佛支間天津條約ニ於テ瓊州、潮州、臺灣、淡水、登州及南京ノ
開放ヲ約シタリ(第六條)。

西曆千八百五十八年六月十三日ノ露支間天津條約ニ於テ爾後露支間通商ハ國境ニ於ケルニ定メ場所
ニ於テノミナラズ海路ニ依リ行ハレ得ベキヲ定ムルト共ニ露國商船ハ通商ノ爲上海、寧波、福州、
廈門、廣東、臺灣府及瓊州府ニ來航シ得ベキ旨ヲ規定シタリ(第三條)。

七 第二次英佛聯合戰爭ノ結果締結セラレタル西曆千八百六十年十月二十四日ノ英支間北京條約(第

四條) 及西曆千八百六十年十月二十五日ノ佛支間北京條約(第七條)ニ於テ天津ノ開放ヲ認メタリ。
西曆千八百六十年十一月十四日ノ露支間北京條約ニ於テ國境貿易ニ關シ規定ヲ設ケ(第四條)又恰克圖ニ於ケル貿易ノ外商用ヲ爲恰克圖ヨリ北京ニ到ルノ商權利及其ノ途中庫倫及張家口ニ於テ貿易ヲ行フニトシ認ムルト共ニ(第五條)伊犁及塔爾巴哈臺ニ於ケルト同一ノ基礎ニ於テ喀什噶爾ヲ試行的ニ開放スベキ旨ヲ定メタリ(第六條)。

八、英佛聯合戰争後西曆千八百六十年代ニ於テ支那國ハ英米佛露以外ノ諸國トノ修好通商條約ヲ締結シタリ。即チ西曆千八百六十二年九月三日ノ獨支間天津條約、西曆千八百六十二年八月十三日ノ葡支間天津條約、西曆千八百六十三年七月十三日ノ葡支間天津條約、西曆千八百六十三年十月六日ノ葡支間天津條約、西曆千八百六十四年十月十日ノ西支間天津條約、西曆千八百六十五年十一月二日ノ白支間北京條約、西曆千八百六十六年十月二十六日ノ伊支間北京條約及西曆千八百六十九年九月二日ノ澳支間北京條約之レナリトス。右諸條約ハ何レモ英米佛ノ諸國ト支那國トノ間ノ既存條約ノ例ニ倣ヒ諸港市ノ開放ニ付規定ヲ設ケタリ(註八)。

(註八) 葡支間條約第六條、葡支間條約第十條、丁支條約第十條、葡支間條約第二條、西支間條約第五條、白支間條約第十條、伊支間條約第十一條、澳支間條約第八條參照。

九、西曆千八百七十六年九月十三日ノ英支間芝罘條約ニ於テ宜昌、蕪湖、溫州及北海ヲ新ニ開放シ、重慶ニ付テハ四川ニ於ケル英國商事ノ情況ヲ查看スル英國官吏ヲ常駐セシム得ベク汽船通航シ得ルニ至リタル上ハ更ニ商議スベキモノトシ、又大通、安慶、湖口、武穴、沙市ハ開港場ニテアラザレドモ汽船ハ乘客貨物ヲ積卸セシムル爲之ニ寄港スルコトヲ得ベキモノトセリ(第三款)。

一〇、上述ノ外西曆千八百七十年代以後ニ於テ支那國ト諸外國トノ間ニ條約ノ締結又ハ改訂ノ行ハルルト共ニ開放地ノ數ハ漸次増加シ支那ガ勅諭又ハ大總統令等ニ依リ開放シタルモノト併セ約八十有餘(滿洲ニ於ケルモノヲ含ム)ヲ算スルニ至レリ。

一一、支那國ハ前述ノ如ク諸外國トノ條約ニ依リ所謂條約港ナルモノヲ認メタル外自國ノ二方的措置ニ依リ勅諭又ハ大總統令等ヲ以テ特ニ特定ノ場所ヲ外國人ノ居住貿易ノ爲ニ開放シタリ。之レ即チ所謂自開商埠地ナルモノニシテ三都澳(西曆千八百九十八年勅諭)、鄭州(西曆千八百九十八年勅諭)、秦皇島(西曆千八百九十八年勅諭)、鄭州(西曆千九百二十二年大總統令)、濟南(西曆千九百四年勅諭)、周村(西曆千九百四年勅諭)、濰縣(西曆千九百四年勅諭)、吳淞(西曆千九百四年勅諭)、蚌埠(西曆千九百二十三年大總統令)、張家口(西曆千九百十四年大總統令)、歸化城(西曆千九百十四年大總統令)等ハ其ノ例ナリトス。

一二、西曆千八百四十三年十月八日英支間虎門追加條約第七條、五港ニ於ケル英國人ノ居住ノ爲土地

S 1.1.1.0 - 27
118

3833

614

及家屋ヲ設置スベキ旨ヲ定メ、西曆千八百四十四年七月三日米支間望厦條約第十七條及同年十月三十四日佛支間黃埔條約第二十二條ハ夫々開港場ニ於ケル米國人及佛國人ノ居住區域ノ選定ニ付規定シ、西曆千八百七十六年九月十三日英支間芝罘條約第三款第二項ニ於テ「At all ports opened to trade, whether by earlier or later agreement, at which no settlement area has been previously defined, it will be the duty of the British Consul, acting in concert with his colleagues the Consuls of other Powers, to come to an understanding with the local authorities regarding the definition of the foreign settlement area.」ト規定セリ。而シテ右諸條約ノ規定ハ多ク初期ニ於ケル租界設定ノ緣由乃至根據トシテ援用セラレ上海其ノ他ニ於テ專管租界又ハ共同租界ノ形成ヲ見ルニ至レリ（註九）。

（註九）英支間望厦追加條約、米支間望厦條約及佛支間黃埔條約ハ外國人ノ居住ノ爲メ土地家屋ノ取得又ハ外國人ノ居住區域ノ選定ニ付規定シタルモノ、外國人ノ居住地ニ於ケル外國側ノ行政權ヲ認メタルモノニアラザルヲ以テ眞ノ意味ニ於ケル租界ノ設定ヲ約シタルモノト官ヲ得ズ。

一三 明治二十九年十月十九日日支間北京議定書ニ於テ「新開通商市港場ニ日本專有ノ居留地ヲ置クコトヲ安定シ道路管轄及地方警察ノ權ハ日本領事ニ專屬スルモノトス」ト規定シ（第二條）又「清國政府ハ日本政府ヨリ請求ノ上ハ早速上海天津厦門漢口等處ニ日本專有ノ居留地ヲ設クルコトヲ允ズ」ト規定シタルガ（第三條）日支間ニハ明治三十九年ヨリ明治三十四年ニ至ル間ニ於テ夫々

杭州、蘇州、漢口、沙市、天津、福州、厦門、重慶ニ於ケル日本專管居留地ノ設置ニ關シ特別ノ取極ノ締結ヲ見タリ。

一四 大正四年五月二十五日ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ニ於テ「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ自由ニ居住往來シ各種ノ商工業其ノ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得」ト規定シ（第三條）以テ南滿洲全部ヲ開放スルト共ニ南滿洲ニ於テ居住往來シ各種ノ業務ニ從事スル日本國臣民ハ支那國警察法令及課税ニ服スベキモノトシ（第五條）而シテ右日本國臣民ノ服從スベキ警察法令及課税ハ豫メ支那國官憲ニ於テ日本國領事官ト協議ノ上施行スベキモノトセリ（附屬交換公文）。

一五 支那國ニ於テハ外國人ハ内地ニ於テ居住及營業ヲ爲シ得ザルヲ原則トスルモノナルコト既述ノ通ナル處西曆千八百五十八年六月二十六日英支間天津條約ハ英國人ノ支那内地旅行權ヲ認メテ「British subjects are hereby authorized to travel for their pleasure or for purpose of trade to all parts of the Interior, under Passports which will be issued by their Consuls and countersigned by the Local Authorities.....」ト規定シ（第九條）、西曆千八百五十八年六月二十七日佛支間天津條約モ亦佛國人ノ支那内地旅行權ヲ認メタルガ其ノ後英佛以外ノ諸外國トシテ條約ニ於テモ内地旅行權ヲ認メタリ。尙内地ニ關シテハ旅行權ノ外基督教宣教師ノ布教權内地航行權其ノ他一定ノ事項ニ付限ラレタル範圍ニ於テ條約上外國人ノ權利ガ認メラルルニ至リタルモ此ノ點ノ詳細ニ付テ

S 1.1.1.0 - 24

3834

以後述ノ所ニ譲ルベシ。

第二節 開放地ニ關スル日支間條約關係ノ推移

一 明治四年七月二十九日ノ日支間條約及附屬通商章程ハ雙務的平等條約ニシテ支那國ト歐米諸國トノ間ノ前記諸條約ガ多ク片務的の平等條約ナルト異ナルモノナリシガ開放地ニ關シテモ雙務的の平等のナル規定ヲ設ケタリ。即チ條約ニ於テ「兩國好ミヲ通セシ上ハ海岸ノ各港ニ於テ彼此共ニ場所ヲ指定シ商民ノ往來貿易ヲ許スヘシト規定シタル上(第七條)兩國ノ開港場ニ於ケル所謂理事官即チ領事官ノ設置及兩國ノ開港場ニ於ケル在留民ノ取締等ニ付規定ヲ設ケ(第八條乃至第十三條)又附屬通商章程ニ於テ日本ニ於テハ橫濱、箱館、大坂、神戸、新潟、夷港、長崎、築地ヲ開港場トシ支那ニ於テハ上海、鎮江、寧波、九江、漢口、天津、牛莊、芝罘、廣州、汕頭、瓊州、福州、厦門、臺灣、淡水ヲ開港場ト定メ(第一款)兩國ノ開港場ニ於ケル地所ノ借受建物ノ築造ノ自由並ニ内地及不開港場ニ於ケル地所ノ借受及建物ノ築造ノ禁止ニ付規定ヲ設ケ(第二款)不開港場ニ於ケル兩國商船ノ出入及噸稅關稅等ニ付規定ヲ設ケ(第三款乃至第十九款)不開港場ニ於ケル密商ノ取締ニ付規定セリ(第二十七款)(註一〇)。

(註一〇) 明治四年七月二十九日ノ日支間條約規程ニ於テハ治外法權ニ關シテモ支那國ト歐米諸國トノ關係約ニ於ケルト異ナリ。雙務的の平等のナル規定ヲ設ケタルガ右ニ關シテハ第二章第二節ニ於テ詳述スベシ。

二 前記日支間條約規程及附屬章程ハ日清戰爭ノ爲消滅シタル處(媾和條約第六條第二項)明治二十八年四月廿七日ノ日支間媾和條約ニ依リ(イ)日本國ハ支那國ニ於ケル開放地ニ關スル歐米諸國ノ權利利益ニ均霑スルコトナリタルヲミナラズ(第二項)(ロ)新ニ沙市、重慶、蘇州、杭州ヲ開放ヲ約セシメ(第二項第一號)(ハ)日本國汽船ノ航路ヲ宜昌ヨリ重慶ニ至ル迄並ニ上海ヨリ吳淞江及運河ニ入り蘇州ニ至ル迄擴張スベキ旨ヲ定メ(第二項第二號)(ニ)日本國臣民ガ支那内地ニ於テ貨品及生産物ヲ購買シ又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ支那内地へ運送スルニハ右購買品又ハ運送品ヲ倉入スル爲何等ノ税金取立金ヲモ納ムルコトナク一時倉庫ヲ借入ルルノ權利ヲ有スベキ旨ヲ定メ(第三項第三號)(ホ)日本國臣民ハ支那各開市場開港場ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ベク又所定ノ輸入稅ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國へ輸入スルコトヲ得ベキ旨並ニ支那ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各種ノ内地稅賦課金、取立金ニ關シ又清國內地ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ日本國臣民ガ支那へ輸入シタル商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ且同一ノ特典ヲ有スベキ旨ヲ定メタリ(第三項第四號)。

三 明治二十九年七月二十一日ノ日支間通商航海條約第四條ニ於テ開放地ニ於ケル居住營業等ノ自由ニ關シ「日本國臣民ハ其ノ家族、雇員及僱婢ト共ニ現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲メ開キ又ハ將來開クヘキ所ノ清國ノ諸港諸市ニ往來シ居住シ、商工業、製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切合法ノ職業ニ從事

6. 1.1.1.0 - 27

3835

616

シ且其ノ商品及携帶品ヲ搭載シ前記諸開港地ノ間ヲ隨意ニ往來スヘク又其ノ地ニ於テ外國人ノ使用
及占有ノ爲メ既ニ選定シ若ハ將來選定セラレヘキ地區内ニ於テ家屋ヲ賃借賣買シ地所ヲ賃借シ寺
院、墓所、病院ヲ建設スルコトヲ得但シ此等一切ノ事項ニ付最惠國ノ臣民或ハ人民ニ現ニ附與シ若
ハ將來附與スベキモノト同ニ特權及免除ヲ享有スベキモノトスルト規定シ、同條約第六條ニ於テ
内地旅行權ニ關シ「日本國臣民ハ自國領事ヨリ下附シ地方官ノ副署シタル旅券ヲ携帶スルトキハ游
歴又ハ商用ノ爲メ清國内地ノ各地ニ旅行スルコトヲ得而シテ該旅券ハ旅行地方ニ於テ檢査ヲ求メラ
レタルトキハ之ヲ示スベキモノトス該旅券ニ不正ノ點ナキニ於テハ携帶者ハ進行ヲ許可セラレ且其
ノ旅行用ノ爲メ又ハ携帶商品運搬ノ爲メ人夫、畜類、車輛、船隻ヲ雇入ルルニ故障アルヘカラス若
シ旅行者ニシテ旅券ヲ携帶セス又ハ法律ヲ犯ストキハ之ヲ處分スル爲メ最寄ノ領事官ニ引渡スヘシ
但シ其ノ際唯必要ノ拘束ヲ加フルノミニシテ決シテ之ヲ虐待スヘカラス旅券ハ之ヲ發シタル日ヨリ
清曆十三箇月間效力ヲ有スヘシ日本國臣民旅券ヲ携帶セスシテ内地ニ旅行シタルトキハ三百兩ヲ超
過セザル罰金ニ處スヘシ尤モ日本國臣民ハ各開港地ヨリ一百清里以内ニハ五日間ヲ限リシ旅券ヲ携
帶セスシテ游歴スルコトヲ得但シ本條ノ規定ハ之ヲ船舶乗組ノ水夫ニ適用スルコトヲ得ストルト規定
シ、同條約第五條第一項ニ於テ所謂立寄港ニ關シ「日本國船舶ハ現ニ立寄港タル安慶、大通、湖口、
武穴、陸溪口及吳淞併ニ將來立寄港トセラレヘキ總テノ場所ニ於テ外國貿易ニ關スル現行章程ニ從

ヒ旅客商品ヲ積卸セシムル爲メ之ニ寄港スルコトヲ得ト規定シタリ。
四 明治二十九年十月十九日ノ日支間北京議定書ニ於テ新開港場ニ於ケル租界ノ設置並ニ租界ニ於ケ
ル道路管轄及地方警察ノ權ノ所屬ニ關シ「新開通商市港場ニ日本專有ノ居留地ヲ置ケコトヲ安定シ
道路管轄及地方警察ノ權ハ日本領事ニ專屬スルモノトス」ト規定シ(第一條)又上海、天津、廈門、
漢口等ニ於ケル專管租界ノ設置ニ關シ「清國政府ハ日本政府ヨリ請求ノ上ハ早速上海、天津、厦
門、漢口等處ニ日本專有ノ居留地ヲ設ケルコトヲ允スヘシ」ト規定シタリ(第三條第二項)。
五 支那各地ノ開港場ニ於ケル專管租界設置ノ原則ニ關シ「前記ノ如ク日支間北京議定書ニ於テ規
定セラレタルガ各地ニ於ケル日本專管租界設置ニ關スル具體的協定ハ夫々特別ノ取極書ヲ以テ締結
セラレタリ。即チ左ノ如シ(註)。
(イ) 明治二十九年九月二十七日ノ杭州日本居留地取極書、明治三十年五月十三日ノ杭州日本居留地
追加取極書、明治三十年五月十三日ノ杭州日本居留地内道路築造費等償辨ニ關スル交換公文、明
治三十年五月十三日ノ杭州日本居留地内ニ於ケル風俗治安ノ取締ニ關スル交換公文、明治三十年
五月十三日ノ杭州日本居留地内大街路取締ニ關スル交換公文、明治三十年五月十三日ノ杭州日本
居留地取極書實施ニ關スル交換公文、明治三十三年二月十二日ノ杭州日本居留地地圖更正ニ關ス
ル交換公文。」ト規定シタリ。
三三三

- (ロ) 明治三十年三月五日ノ蘇州日本居留地取極書、明治三十年三月三日ノ蘇州日本居留地内地税ニ關スル交換公文、明治三十年三月五日ノ蘇州日本居留地ニ關スル支那側公文。
- (ハ) 明治三十二年七月十六日ノ漢口日本居留地取極書、明治四十年二月九日ノ漢口日本擴張居留地取極書。
- (ニ) 明治三十一年八月十八日ノ沙市日本居留地章程。
- (ホ) 明治三十一年八月二十九日ノ天津日本居留地取極書及附屬議定書、明治三十一年十一月四日ノ天津日本居留地取極書續約及附屬議定書續約、明治三十六年四月二十四日ノ天津日本居留地擴張取極書。
- (ヘ) 明治三十二年四月二十八日ノ福州日本專管居留地取極書、明治三十二年四月二十八日ノ福州日本帝國專管居留地別約書。
- (ト) 明治三十二年十月二十五日ノ廈門日本專管居留地取極書及別約、明治三十三年二月二十二日ノ廈門日本專管居留地追加取極書。
- (チ) 明治三十四年九月二十四日ノ重慶日本專管居留地取極書。

(註) 在上海珍田總領事、創令ニ基キ明治二十八年十月乃至二十九年五月ノ間ニ於テ自、蘇州、杭州、沙市、重慶ニ出頭シ現地調査ヲ行フト共ニ當該地方支那官廳ト專管居留地設定ニ關シ交渉ヲ行ヒタリ。然ルニ蘇州及杭州ニ於テハ設定地區ノ選擇ニ付テハ雙方ノ意見一致シタルニ支那側ハ(イ)同地區ヲ以テ各國共通商場ニ充テ(ロ)右地區内ノ警察權ハ支那政府

ニ於テ專管居留地(ハ)道路ヲ原則トシテ支那側ノ管轄ニ屬セシムルノ三點ヲ主張シ我專管居留地ノ設定ニ反對シタリ。仍チ專管居留地設定方ニ關シ在北京林公使トシテ總理衙門ニ申入レシメタル處衙門ヨリ先ノ蘇州ニ專管居留地ヲ開設スベク杭州、沙市、重慶ハ之ニ倣フ機關合濟ノ旨十二月初回答アリタリ。次テ在上海加藤書記生ハ領事代理トシテ明治二十九年早々蘇州ニ赴キ現地ノ引渡ヲ求メタルニ支那側ハ之ニ應ゼズ。他方杭州ニ於テ支那側官廳ハ居留地豫定地域ノ地圖ヲ作成シ土木工事ヲ着手シ居留地ニ警察事務專管ノ外國人ヲ雇入リ巡捕隊ヲ編成スル等々準備ヲ進メタリ。

明治二十九年七月帝國政府ハ在杭州小田切領事、在上海珍田總領事、在沙市永瀧領事ニ夫々訓令ヲ發シ至急居留地取極ヲ成立シメラレ度ヲ警察權ノ問題ニ付西口ニ付西口ニ警察權ヲ一時支那側ニ委託スルノ形トシテ議ヲ懸メラルベキ旨命シタル處小田切領事、結果同年九月二十七日附テ以テ杭州日本居留地取極書ニ關シ其ノ第二條、第三條、第四條、第十三條ニ於テ警察及道路ニ關シ或程度迄支那側ノ主張ヲ取入レタル規定ヲ設ケタリ。然レドモ其ノ後我方ハ總該居留地ニ於テ道路管轄及警察權ニ關シ我領事ノ專管ヲ主張シ交渉ノ結果明治二十九年十月十九日ノ北京議定書ニ於テ居留地ニ於テ道路管轄及警察權ハ日本領事ニ專管スル旨ノ規定ヲ設ケタリ。而シテ前記杭州日本居留地取極書第二條、第三條、第四條、第十三條、明治三十年五月十三日ノ杭州日本居留地追加取極書ニ依リ削除セラレタリ。蘇州及沙市ニ付テハ支那側ハ警察權及道路管轄ノ問題ニ付當初杭州ノ例ニ倣フントシ在漢交涉ヲ引延シタルモ前記北京議定書ノ成立ニ依テ最早議定ノ餘地モナクハ蘇州ニ付テハ明治三十年三月五日ノ沙市ニ付テハ明治三十二年八月十八日夫々取極ノ成立ヲ見タリ。

六 明治三十六年十月八日ノ日支間追加通商航海條約ニ於テ(イ)内水航行權ニ關シ「清國政府ハ内河航行ニ適スル各種ノ日本國汽船カ清國海關ニ届出テノ上内地水路汽船通航規則及同追加規則ニ依リ貿易ノ目的ヲ以テ清國開港場ヨリ其ノ届出テタル内地ニ航行スルコトヲ承諾ス」ト規定シ(第二條)且光緒三十四年五月ノ内地水路汽船通航規則及同年七月ノ追加規則ハ實行上不便ノ箇所アルヲ以テ清國政府ハ之ニ修正ヲ加ヘ本條約ニ右新規則ヲ添付スヘキコトヲ約ス此等ノ規則ハ相互ノ同意ニ依リ變改セラズルヲ其ノ效力ヲ有スルニトス」ト規定スル(第八條)追加内地水路汽

船航通規則及之ニ關聯スル規定ヲ設ケ(附屬第一號乃至第五號)(ロ)北京ノ開放ニ關シ「兩締盟國ハ直隸省ニ駐屯スル外國軍隊及公使館護衛兵ヲ撤退シタル場合ニ於テ清國ハ直ニ自ラ進テ外國人ノ居住及貿易ヲ爲メ北京市内ノ一地區ヲ開ク」ト規定シ其ノ時ニ於テ雙方協議ノ上決定スヘキト約ス(以下規定スルト共ニ)(第十條第二項)公文ヲ交換シ(附屬第六號及第七號)(ハ)長沙ノ開放ニ關シ「清國政府ハ本條約批准交換ノ日ヨリ六箇月以内ニ既ニ外國貿易ニ開カレタル港市同ノ條件ヲ以テ湖南省長沙府ヲ外國貿易ノ爲メニ開ク」ト約ス同開港場在留外國人ハ清國居住民ト同シク地方及警察規則ヲ遵守スヘク清國官廳ノ承諾ヲ得ルニ非サレバ該條約港區域内ニ自己ノ地方役場又ハ警察ヲ設置スルコトヲ得ス」ト規定シ(第十條第二項)(ニ)奉天、大東溝ノ開放ニ關シ「清國政府ハ本條約批准交換後直ニ各國人ノ居住及貿易ノ爲メ自ラ進テ盛京省奉天府及同省大東溝ヲ開ク」ト約ス外國人ノ使用ニ供スル爲メニ適當ナル地域ノ撰擇並外國人ノ居住及貿易ノ爲メ定メラルル場所ノ規則ハ日清兩國政府協議ノ上之ヲ定ムヘシ」ト規定シタリ(第十條末項)。

七、明治三十八年十二月二十二日ノ滿洲ニ關スル日支間條約ノ附屬協定ニ於テ(イ)滿洲ニ於ケル諸都市即チ鳳凰城、遼陽、新民屯、鐵嶺、通江子、法庫門、長春(寬城子)、吉林、哈爾濱、寧古塔、琿春、三姓、齊齊哈爾、海拉爾、愛理、滿洲里ノ開放ニ關シ清國政府ハ此等ノ都市ヲ日露軍隊撤退ノ

後成ルベク速ニ外國人ノ居住及貿易ノ爲自ラ進ミテ開クベキ旨ヲ定メ(第一條)(ロ)營口、安東及奉天ニ於ケル日本居留地劃定ニ關シ右劃定ノ方法ハ日清兩國官吏ニ於テ別ニ協議決定スベキ旨ヲ定メタリ(第九條)。

八、明治四十二年九月四日ノ間島ニ關スル日支間協約ニ於テ(イ)龍井村、局子街、頭道溝、百草溝、ノ開放ニ關シ清國政府ハ本條約調印後成ルベク速ニ此等ノ地ヲ外國人ノ居住及貿易ノ爲開放スベク開放ノ期日ハ別ニ之ヲ定ムベキ旨ヲ規定シ(第二條)(ロ)圖們江北方聖地ニ於ケル韓民ノ居住及右韓民ニ對スル法權其ノ他ニ付規定シタリ(第三條乃至第五條)。

九、大正四年五月二十五日ノ山東省ニ關スル日支間條約ニ於テ支那國政府ハ成ルベク速ニ外國人ノ居住貿易ノ爲自ラ進ミテ山東省ニ於ケル適當ナル諸都市ヲ開放スベキト約ス(第三條)又同日附ノ交換公文ニ於テ右諸都市及開埠章程ハ支那國政府自ラ之ヲ擬定シ豫メ日本國公使ニ協議ノ上決定スベキ旨ヲ定メタリ。

一〇、大正四年五月三十五日ノ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル日支間條約ニ於テ(イ)南滿洲ニ於ケル商租權ニ關シ「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ各種商工業上ノ建物ヲ建設スル爲メ又ハ農業ヲ經營スル爲メ必要ナル土地ヲ商租スルコトヲ得」ト規定シ(第二條)(ロ)南滿洲全部ノ開放ニ關シ「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ自由ニ居住往來シ各種ノ商工業其ノ他ノ業務ニ従事スルコトヲ得」ト規定シ(第三條)。

S 1.1.1.0 - 27 3838

(六) 東部内蒙古ニ於ケル農工業ノ合辦經營ニ關シ日本國臣民カ東部内蒙古ニ於テ支那國國民ト合辦ニ依リ農業及附隨工業ノ經營ヲ爲サントスルトキハ支那國政府之ヲ承認スルニシテ規定シ(第四條) (七) 前記南滿洲ニ於ケル土地商租、南滿洲全部ノ開放及東部内蒙古ニ於ケル農工業ノ合辦ノ場合ニ於ケル日本國臣民ニ對スル警察權、課稅權、裁判權ノ關係等ニ關シ日本國臣民ハ例規ニ依リ下附セラレタル旅券ヲ地方官ニ提出シ登録ヲ受ケ又支那國警察法令及課稅ニ服スヘシ(第五條第一項) 民刑訴訟ハ日本國臣民被告タル場合ニハ日本國領事官ニ於テ又支那國國民被告タル場合ニハ支那國官吏ニ於テ之ヲ審判シ五三員ヲ派シ臨席傍聽セシムルコトヲ得但シ土地ニ關スル日本國臣民及支那國國民間ノ民事訴訟ハ支那國ノ法律及地方慣習ニ依リ兩國ヨリ員ヲ派シ共同審判スヘシ(第五條第二項) 將來同地方ノ司法制度完全ニ改良セララルトキハ日本國臣民ニ關スル一切ノ民事訴訟ハ完全ニ支那國法廷ノ審判ニ歸スヘシ(第五條末項) 下規定スルニ共ニ附屬交換公文ニ於テ前記日本國臣民ノ服從スル警察法令及課稅ノ豫メ支那國官憲ニ於テ日本國領事官ト協議ノ上施行スベキ旨ヲ定メ(五) 東部内蒙古ニ於ケル都市ノ開放ニ關シ支那國政府ハ成ルベク速ニ外國人ノ居住貿易ノ爲自ラ進ミテ東部内蒙古ニ於ケル適當ナル諸都市ヲ開放スベキ旨ヲ約スルニ規定スルト共ニ(第六條) 附屬交換公文ニ於テ右諸都市及商埠章程ハ支那國政府自ラ之ヲ擬定シ豫メ日本國公使ト協議ノ上決定スベキ旨ヲ定メタリ。

一六 大正四年五月二十五日膠州灣租借地ニ關スル日支間交換公文ニ於テ日本國政府ハ現下ノ戰役終結後膠州灣租借地ニシテ全然日本國ノ自由處分ニ委セラルル場合ニ於テハ(一) 膠州灣全部ヲ商港トシテ開放スルコト(二) 日本國政府ニ於テ指定スル地區ニ日本專管居留地ヲ設置スルコト(三) 列國ニシテ希望スルニ於テ別ニ共同居留地ヲ設置スルコト(四) 右ノ外獨逸ノ營造物及財産ノ處分並其ノ他ノ條件手續等ニ付キテハ還付實行ニ先テ日本國政府ト支那國政府トノ間ニ協定ヲ遂グベキ旨トノ條件ノ下ニ該租借地ヲ支那國ニ還附スベキ旨ヲ聲明シタリ。

二二 大正十二年二月四日山東懸案解決ニ關スル日支間條約第二十三條ニ於テ膠州灣租借地ノ開放ニ關シ日本國政府ハ舊獨逸膠州租借地ニ於テ日本專管居留地又ハ國際居留地ノ設置ヲ要求セザルヘキコトヲ聲明ス(第一項) 支那共和國政府ハ之ニ對シ舊獨逸膠州租借地全地域ヲ外國貿易ノ爲ニ開放スヘキコト及外國人ハ右地域内ニ於テ自由ニ居住シ且商業、工業其ノ他一切ノ合法ノ業務ニ從事スルコトヲ許サルヘキコトヲ聲明ス(二) 規定スルト共ニ附屬書ニ於テ外國居留民ノ市政參與ニ關シ「支那共和國政府ハ支那國ニ於ケル地方自治制度ヲ定ムル法令ノ制定及其ノ一般ノ適用ヲ見ルニ至ル迄ハ舊獨逸膠州租借地内ノ外國居留民ノ福祉及利益ニ直接ノ影響アルヘキ市政事項ニ付支那地方官憲カ該居留民ノ意見ヲ確ムヘキコトヲ聲明ス」ト規定シ(附屬書六) 又了解事項ニ於テ舊獨逸膠州租借地内ニ於テ外國人ノ從事シ得ベキ「合法ノ業務」ヲ解釋ニ關シ規定シタリ(了解事項第一二九)

6 1.1.1.0-27 3839

620 0.1.1.1

一、支那國ノ前述べ如ク阿片戦争後ノ英支間南京條約締結以來諸外國トノ條約ニ基キ開放地ヲ設定シタル外國ノ一方ノ意思ニ依リ勸諭又ハ大總統令等ヲ以テ開放地ヲ設定シタリ。諸外國トノ條約ニ基キ設定セラレタル開放地ハ普通ニ條約港ト稱セラレ支那國ノ單獨ノ意思ニ基キ設定セラレタル開放地ハ一般ニ自開商埠地ト呼バラルモノナルコト周知ノ通ナリ。(註)XIII, Do.

(註)一、條約ニ基キ開放地ノ中ニハ條約ノ規定ノ結果條約當然ノ效力トシテ開放セラレタルモノアリ。(例)ハ日清議和條約第六條第二項ニ依リ沙市、重慶、蘇州、杭州ノ開放。又條約ニ於テハ特定都市ノ開放ノ主義ヲ認メタルノミニテ開放ノ實施ハ支那國政府自ラ進テ之ヲ爲スベキ旨ヲ定メタルモノアリ。(例)ハ日支間追加通商航海條約第十條第一項北京ノ開放及同條第三項奉天及大東溝ノ開放。又條約ニ於テハ開放セラレベキ都市ヲ特定セズ單ニ一定地方ノ適當ノ都市ヲ支那國政府自ラ進テ開放スベキ旨ヲ定メタルモノアリ。(例)ハ山東省ニ關スル日支間條約第三條ノ山東省ニ於ケル諸都市ノ開放。

(註)二、開放地ノ種類ハ其ノ設定ガ條約ニ基キテ支那國政府ノ意思ニ基キテ依リテ所謂條約港ト自開商埠地トニ分類シ得ルノ外又他ノ標準ニ依リテ一般開放地ト租界トニ分類スルコトヲ得。尙租界ニ特別ナル法律關係ノ說明ハ別稿ニ譲ル。

二、所謂條約港ト自開商埠地トハ其ノ設定ノ根據ヲ異ニスルモ開放地タル點ニ於テ異ナル所ナク條約國乃至條約國民ノ享有スベキ權利ハ條約港ニ於ケルト自開商埠地ニ於ケルトニ依リテ差異アルモノニアラズ。蓋シ明治二十九年ノ日支間通商航海條約第四條ニ依リテ「日本國臣民ハ其ノ家族、雇員及僕婢ト共ニ現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲開キ又ハ將來開クベキ所ノ清國ノ諸港諸市ニ往來シ、住

621

居シ商工業、製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切合法ノ職業ニ従事シ、トアリ。即チ苟クモ「現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲開キ又ハ將來開クベキ所ノ清國ノ諸港諸市」ハ何レモ開放地トシテ均シク日本國臣民ノ居住營業等ノ自由ヲ認メラルル地域ニシテ右開放地ノ設定ガ條約ニ依ル場合即チ所謂開ノ場合タルト支那國ノ一方ノ意思ニ依ル場合即チ所謂自開ノ場合タルト開ハザルモノトス。(註)O.

(註)一、日支間通商航海條約第四條日本本文「現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲開キ又ハ將來開クベキ所ノ清國ノ諸港諸市」ニ該當スル漢文本「在中國已開及日後約開通商口岸城鎮」トナリ將來設定ノ開放地ニ付テハ約開ノモニ限ルカ如キ字句ヲ用ヒアルモ日本本文ト漢文本トノ間ニ解釋ナ異ニシタルトキ其ノ異ナル點ヲ決斷スベキ正文トシテ定ムラハキハ英文本文「... in all the ports, cities and towns of China, which are now, or may hereafter be opened to foreign residence and trade」トナリ日本本文ト全然同意義ナリ。

三、開放地ノ地位ヲ論ズルニ當リ豫メ一言シ置クヲ要スルハ最惠國約款ノ關係ナリ。日支間通商航海條約ハ第四條ヲ以テ「日本國臣民ハ其ノ家族、雇員及僕婢ト共ニ現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲開キ又ハ將來開クベキ所ノ清國ノ諸港諸市ニ往來シ、住居シ商工業、製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切合法ノ職業ニ従事シ且其ノ商品及携帶品ヲ搭載シ前記諸開港地ノ間ヲ隨意ニ往來スベク又其ノ地ニ於テ外國人ノ使用及占有ノ爲既ニ選定シ若ハ將來選定セラレベキ地區間ニ於テ家屋ヲ賃借買置シ地所ヲ賃借シ、寺院、墓所、病院ヲ建設スルコトヲ得但シ此等一切ノ事項ニ付最惠國ノ臣民又ハ人民ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スベキモノト同一ノ特權及免除ヲ享有スベキモノトス」ト規定シ、第二十五

3840

條第三項ヲ以テ且日本國ノ政府及臣民ハ大清國皇帝陛下ヨリ他國ノ政府又ハ臣民ニ現ニ附與シ又ハ將來附與スヘキ一切ノ特權ヲ免除及利益ヲ享有スヘキコトヲ特ニ規定スルトシ又日支間追加通商航海條約ハ第九條第一項ヲ以テ且日清兩國間ニ現ニ存在スル凡テノ條約及約定ノ規定ハ本條約ニ依テ改正又ハ廢止セラレバ其ノ限リ茲ニ其ノ效力ヲ確認ス又日本國ノ政府官吏臣民通商航海運送工業又一切ノ財産ハ大清國皇帝陛下又ハ清國政府又ハ清國諸省若ハ地方官衙ヨリ他國ノ政府官吏臣民通商航海運送工業又ハ財産ニ既ニ附與セラレ又ハ將來附與セラレベキ一切ノ特權免除及利益ヲ自由且完全ニ享有スヘキコトヲ明ニ茲ニ規定スルトセリ。從テ開放地ニ關シテモ我國乃至我國民ノ有スル權利利益ノ内容ハ直接ニ日支間條約ニ依リ規定セラレルモノノ外他ノ諸外國乃至諸外國人ガ開放地ニ關シテ享有スル特權免除及利益ヲ包含スルモノナリ。(註四)

(註四) 日支間通商航海條約第二十五條第二項下日支間追加通商航海條約第九條第一項下ニ比較スルニ權利利益ノ附與者ハ(註附與者及均等事項等ニ於テ後者ノ適用範圍ハ前者ヨリモ一層廣汎ニナリタルモノト解釋スルヲ得ベシ)

四 開放地ノ地位ハ之ヲ内地ノ夫レト比較スルコトニ依リテ一層明確ナラシムルヲ得ベキヲ以テ茲ニ内地ノ性質ト對照シツツ順次開放地ノ地位ヲ解明スルコトトスベシ。

尙開放地及内地ノ地位ハ條約國乃至條約國民ニ對スル關係ニ於ケルト無條約國乃至無條約國民ニ對スル關係ニ於ケルト依リ異ナリ又條約國乃至條約國民中ニ若干ヲモ其ノ條約關係ノ如何ニ依リ同

622

シカラザル點アルモ茲ニ日支間條約ニ基テ我國及我國民ノ立場乃至我國及我國民ト同一ノ條約上ノ地位ニ立ツ治外法權國及治外法權國民ノ立場ヨリ見タル開放地及内地ノ性質ヲ論ズルコトトスベシ(從ツテ以下開放地及内地ニ關シテ外國及外國人ハ享有スル權利ニ付云々スル場合ハ常ニ我國及我國民ヲ合ム一般治外法權國及治外法權國民ノ享有スル權利ヲ指スモノトス)

五 開放地ハ外國人ノ居住權及一切合法ノ業務ニ從事スルノ權利ヲ認マラル地域ナリ。日支間通商航海條約第四條ニ日本國臣民ハ現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲開キ又ハ將來開クベキ所ノ清國ノ諸港諸市ニ居住シ商業製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切合法ノ職業ニ從事スルコトヲ得ベキ旨ヲ規定セルハ即チ開放地ニ於ケル居住權及業務權ヲ明認スルモノナリ(註五) 然ルニ外國人ハ内地ニ於テハ一般ニ居住權ナク又開放地ニ於ケルガ如ク廣キ範圍ニ於テ業務權ヲ認メラレズ。即チ外國人ハ遊歴又ハ商用ノ爲内地ニ旅行スルノ權利ヲ有スルモ開放地ニ於ケルト異ナリ内地ニ定住スルノ權利ヲ有セズ(註六) 又外國人ハ開放地ニ於テハ商業權ノ外工業其ノ他一切合法ノ業務ニ從事スルノ權利ヲ有スルニ反シ内地ニ於テハ原則トシテ商業權ノミヲ有スルニ過ギズ而モ右商業權ハ居住權ヲ伴ハザルヲ以テ定着商業ニ非ズシテ單ニ旅商取引ヲ行フノ權利タルニ過ギズ(註七)

(註五) 開放地ニ關スル沿革ヲ見ルニ開放地ハ元來外國人ノ居住及貿易ノ爲設ケラレドモ今ニシテ當初ノ開放地ニ於ケル外國人ノ業務權ハ單ニ貿易權利即チ商業權ニ限ラレドモ日清協和條約ニ依リ工業權殊ニ製造業權ヲ認メラレ(第六條)更ニ日支間通商航海條約ニ依リ商業製造業其ノ他一切合法ノ職業ニ從事スルノ權利ヲ認メラレ(第九條)更

6 1.1.1.0 - 27 3841

(註六) 開放地沿革史ノ初期ニ於テハ外國人ハ開放地外ノ内地ニ出ツルヲ許サズ現シテ内地ニ於テ商取引ヲ爲スノ權利ノ如キハ全然認めラレザル也西曆千八百五十八年ノ天津條約ハ外國人ハ遊歴又ハ商用ノ爲メ内地ニ旅行スルノ權利ヲ認め(本第一節二五參照)又日支通商航海條約モ亦内地旅行權ヲ認め(本第一節二五參照)又(本第一節二五參照)西曆千八百六十二年十月六日調印ノ日支通商航海條約ハ遊歴又ハ商用ノ内地旅行權ヲ認め(本第一節二五參照) They shall not be allowed to establish commercial houses or shops in the interior (第三條末段)。

六、内地ニ於ケル外國人ノ權利ニ關シ言及スルヲ要スルハ立寄港制度及内地水路航行權ナリ。日支通商航海條約第五條ハ日本國汽船ハ現ニ立寄港ナル安慶、大通、湖口、武穴、陸溪口及吳淞並ニ將來立寄港トセラルベキ場所ニ於テ旅客商品ヲ積卸セシムル爲メ之ニ寄港スルコトヲ得ル旨ヲ定ム。即チ立寄港トシテ特ニ定メラレタル内地ノ市邑ニ於ケル日本國汽船ノ旅客商品積卸ノ爲メ寄港權ヲ認め。然レドモ内地タル立寄港ニ於ケル外國人ノ權利ハ右ニ限ラルモノナルヲ以テ開放地ニ於ケルトハ著シク相違アリ(註八)。

日支間追加通商航海條約第三條ハ内河航行ニ適スル各種日本國汽船ガ清國海關ニ届出デノ上内地水路航行權ニ付テハ内地水路航行規則ニ依リ種々ノ制限ヲ伴フモノニシテ開港場ニ於ケル航運業ニ於ケルガ如ク自由ナルモノニアラス(註一〇)註一〇) 英支間天津條約第三條第一項末段 Foreign Merchants will not be authorised to reside or open houses of business or warehouses at the places enumerated as ports of call (註九) 日支間追加通商航海條約第三條ハ内地水路航行權ヲ航行スル日本國汽船ハ内地水路航行規則及追加規則ニ依リ種々ノ制限ヲ受ケルベキ旨ヲ定ム(註九) 光緒二十四年五月ノ内地水路航行規則及追加規則ハ實上不便ノ箇處アルヲ以テ清國政府ハ之ニ修正ヲ加ヘ本條約ニ右新規則ヲ添附ス(キ)トシ約ニ此等ノ規則ハ相互ノ同意ニ依リ修改セララルベキ旨ヲ定ム(註九) 規定ニ十箇條ヨリ成ル追加内地水路航行規則ハ新ニ協定シタルガ同規則第十條則ニ依リ改メラレザル事項ハ全效トシテ規定セシメ(註一〇) 内地水路航行權ニ付テハ汽船以外ノ船舶ニ付テハ又内地水路航行權ハ水路沿岸ニ於テ埠頭ノ築造賃借、倉庫ノ賃借等ノ權利ヲ含ム右權利ニ付テハ期限、課税等ノ制限アルノ外内地水路航行ニ付テハ開放地ニ於ケルトハ著シク相違アリ(註八)。

七、内地ニ於ケル外國人ノ一般ニ居住權ヲ有セズ且商業權以外ノ業務權ヲ有セザルヲ原則トスルコトハ前述ノ通りナルモ基督教宣教師ニ付テハ例外アリ。即チ基督教宣教師ハ内地ニ於テ布教權及居住權ヲ有スルノミナラズ土地家屋ノ賃借及承租權ヲ認めラル(註一二)。

(註一二) 内地ニ於ケル基督教宣教師ノ布教權ハ西曆千八百五十八年六月二十七日調印ノ佛支間天津條約等ヲ以テ認めラル(註一二)。

6 1.1.1.0 - 27 3842

623 0.1.1.1 2

又土地家屋ノ賃借及水租權ハ西曆千九百三年十月八日開印ノ支那通商關係條約ニ關スル條約等ヲ以テ認メラルモノナ
ルガ有土地家屋ニ關スル權利ノ認メラルルハ布教ノ爲メ内地居住權ノ存在ヲ前提トスルモノト解釋スルコトヲ得。

八、開放地ト内地トハ前記ノ如ク外國人ノ居住權及業務權ニ付差異アルノミナラズ外國人ノ往來權ニ
付テモ相違アリ。即チ外國人ハ開放地ヘノ往來ニ付テハ條約上別段ノ制限ヲ受ケザルモ内地ヘノ往
來ニ付テハ條約上一定ノ制限アリテ旅券ヲ攜帶ヲ必要トス。(註一三〇)

(註一三〇) 日支通商航海條約第六條ハ日本國臣民ハ自國領事官ノ下附シテ地方官ノ副署シテ旅券ヲ攜帶スルトキハ游歴
又ハ商用ノ爲清國內地各都府縣行方ヨリ得而シテ該縣行方ニ於テ檢査ヲ求メラレタルトキハ之ヲ示スヘキ
モノトス該縣官ニ不正ノ點ナキニ於テハ携帶者ハ進行ヲ許可セラル且其ノ旅行ノ爲又ハ携帶品運搬ノ爲人夫ハ畜類
車輛船隻ヲ雇入ルルニ故障アルカガ若シ旅行者ニシテ旅券ヲ攜帶セズ又ハ法律ヲ犯ストキハ之ヲ處分スル爲最寄
領事官ニ引渡シ但此ノ際必要ノ拘束ヲ加フルルニシテ決シテ之ヲ處罰スルカラス旅券ハ之ヲ發シタル日ヨリ滿
十三箇月間効力ヲ有ス日本國臣民旅券ヲ攜帶セシメテ内地ニ旅行シタルトキハ三百兩ヲ超過セザル罰金ニ處スヘシ尤
モ日本國臣民ハ各開港地ヨリ一百兩以內ニハ五日間ヲ限リテ旅券ヲ攜帶セシメテ游歴スルコトヲ得但本條ノ規定ハ
之ヲ船舶乗組ノ水夫ニ適用スルコトヲ得ズルコトヲ規定セリ。

九、開放地ト内地トハ外國人ノ土地及家屋ニ關スル權利ニ付テモ差異アリ。即チ外國人ハ開放地ニ於
テハ土地ヲ賃借又ハ承租シテ家屋ヲ建設シ、所有シ、賃借スルノ權利ヲ有スルモ内地ニ於テハ原
則トシテ右權利ヲ認メラズ。(註一四〇)(註一五〇)

(註一四〇) 日支通商航海條約第四條ニハ日本國臣民ハ其ノ地ニ於テ外國人ノ使用及占有ノ爲既ニ選定シ若ハ將
來選定セラルヘキ地域内ニ於テ家屋ヲ賃借買置シテ所ヲ賃借シ、又ハ之ヲ規定セルテ土地家屋ニ關スル權利ノ享有
ヲ開放地中特定ノ地域内ニ限ララルルガ如キモ支那他國ト條約ノ規定例ハ英支間天津條約第十二條及米支間天津條約

第十二條ニ依リ開放地ノ如何ナル場所ニ於テモ右權利ハ認メラルモノナルヲ以テ日本國臣民モ日支通商航海條約中
ノ最要國約款ニ依リ右利益ニ均霑スルコトヲ得ルモノトス。

(註一五〇) 内地水路汽船通規則ニ依リ内地水路沿岸ニ於ケル埠頭ノ築造、賃借又ハ倉庫借入ノ權利、宜昌重要開港場以上モ
開港場ノ設備ヲ爲ス權利、基督教宣教師ノ内地ニ於ケル土地家屋ニ關スル權利ニ付テハ本節中義ニ言及シタル。

一〇、前記ノ如ク開放地ニ於テハ治外法權國人ハ一切合法ノ職業ニ従事スルノ權利ヲ有スルモノナル
處茲ニ所謂合法ノ職業トハ條約ニ別段ノ規定ナキ限リ各治外法權國ノ法令ニ照シ合法ナル職業ト解
スルノ外ナク從テ例ヘバ農業又ハ漁業ノ如キモ條約中別段ノ規定ナク且治外法權國ノ法令ヲ以テ開
放地ニ於テ之ヲ禁止セザル以上治外法權國人ハ開放地ニ於テ之ニ従事スルノ權利アリト解セザルベ
カラズ。(註一六〇)

(註一六〇) 大正十一年二月四日開印ノ山東懸案解決ニ關スル條約第二十三條第二項ハ「支那共和國政府ハ之ニ對シ魯西豫鄂州
租借地全地域ヲ外國貿易ノ爲ニ開放スベキコト及外國人ハ右地域内ニ於テ自由ニ居住シ且商業、工業其ノ他一切ノ合法ノ業
務ニ従事スルコトヲ許サルベキコトヲ聲明ス」ト規定スル共ニ兩國委員間ノ了解事項ヲ以テ「條約第二十三條ノ合法ノ業
務ナル語ハ支那國法令ヲ以テ禁止シ又ハ支那國及諸外國間ノ條約上外國人ニ許サル農業其ノ他ノ企業ヲ含ムモノト解釋
スヘカラス尤モ右解釋ハ條約第二十五條ニ規定スル製鹽業ノ問題又ハ條約第二十四條ニ基キ決定セラルヘキ區權ニ關ス
ル如何ナル問題ニモ影響ヲ及ボササルモノトス」トセリ。從テ魯西豫鄂州開放地ニ關スル限リ製鹽業及區權ニ關ス
ルモノノ外支那國法令ニ依リ外國人ニ對シ禁止セラルル農業其ノ他ノ企業ハ總テ所謂合法ノ業務ト見ルヲ得ザルモノト
ス。

一一、日支通商航海條約第三條第二項ハ「大日本國皇帝陛下ハ外國通商ノ爲ニ現ニ開カレ若ハ將來
開カレヘキ清國ノ港市ノ内日本帝國ノ利害ニ必要ナリト認ムル場所ニ總領事官、領事官、副領事官及代辦

領事ヲ駐在セシムルニ得ト規定ス。即チ開放地タル以上條約港タルト自開商埠地タルトヲ問ハズ帝國ノ必要ト認ムル場所ニ領事官ヲ駐在セシムルノ權利ヲ認ム。然レドモ内地ニハ領事官ヲ駐在セシムルコトヲ得ズ。(註一七〇)

(註一七) 日支通商條約第三條中日本支那ノ「外國通商」ノ語ニ開カレ若ハ將來開カレキ清國ノ港市ニ該當スル漢文本文ハ「在中國已開及日後約開通商各口岸城鎮」トアリテ兩者意義ヲ異ニスル點アルモ英文本文ハ「The ports, cities and towns of China, which are now, or may hereafter be, opened to foreign residence and trade」トアリテ日本支那兩國條約ノ開放地ヲ約同ノモノニ限定セキ。

第二章 治外法權ニ關スル日支間條約關係

第二節 支那國ニ於ケル治外法權制度ノ沿革

一 支那國ニ於ケル治外法權制度ハ阿片戰爭以後支那國ト列國トノ間ノ多數ノ條約及實際ノ慣例ニ依リ發達シ來レルモノニシテ其ノ先驅ヲ爲ス條約ハ千八百四十三年十月八日ノ英支間虎門追加條約附屬通商章程ナリトス。(註一七二)

阿片戰爭以前ノ時代ニ於テモ支那國ニ外國人ニシテ事實上支那國ノ裁判權ニ服セザリシ事例無キニアラスト雖モ此ノ時代ニ於テハ支那國ハ未ダ外國人ニ對シ法律上治外法權的地位ノ享有ヲ承認シ居タル次第ニアラス。(註一七三)

(註一七二) 千六百八十九年八月二十七日(舊曆)ノ露支間尼布楚條約、千七百一十七年十月二十一日(舊曆)ノ露支間恰克圖條約及千七百六十八年十月十八日(舊曆)ノ露支間恰克圖追加條約ニ於テ該國地方ニ於ケル犯罪人ノ引渡及處分ニ付定メタル條項アリテ右ハ一種ノ治外法權的取扱ヲ相互的ニ認ムルモノト解シ得ラルニアラズト雖モ支那國ニ於ケル現行治外法權制度ノ起源ヲ論ズルニ當リテハ前記露支間條約ノ之ヲ重視スルノ要ナリトス。

(註一七三) 阿片戰爭以前歐米人ニシテ支那國官憲ニ依リ殺人犯ノ處ニ四リ死刑ニ處セラレタル事例展キアリタルガ(例、千七百八十年英國船 Royal George 號乗組員殺人事件、千七百八十五年英國船 Royal George 號乗組員殺人事件、千八百二十一年英國船 Royal George 號乗組員殺人事件)一方ニ於テ歐米人殊ニ米國人ハ出來得ル限リ支那國刑罰權ヲ干渉シ免ルルニ努メタリ(例、千八百十年英國船 Royal George 號乗組員殺人事件、千八百二十一年英國船 Royal George 號乗組員殺人事件、千八百三十七年英國船 Royal George 號乗組員殺人事件)。

二 阿片戰爭ノ直接ノ結果タル千八百四十二年八月二十九日ノ英支間南京條約ニ於テハ治外法權ニ關シ未ダ何等ノ規定ヲ設ケルニ至ラザリキ。蓋シ英國政府ノ當初ノ交渉案中ニハ治外法權ノ設定ニ關スル項目ヲ含ミタルモ英國政府ハ先ツ南京交渉ニ於テハ香港ノ割讓及五港ノ開放ノ二點ニ第二次的重點ヲ置キタル結果治外法權ニ關スル事項ハ遂ニ南京條約ノ規定ヨリ落ツルニ至リタル次第ナリ。(註一七四)

(註一七四) Lord Palmerston ノ英國全權委員ニ與ヘタル訓令中條約ノ主要條項タルべきモノトシテ十三條中條約ノ第十條ニ「The Superintendent of Trade, or Consul-General shall, if ordered to do so by his own Government, be at liberty to make Rules and Regulations and to establish Courts of Justice for the government of British Subjects in China; and that if any British Subject shall be accused of any offence or crime, he shall be tried by the Tribunal which may be established by the Superintendent or Consul-General for such a purpose; and that his punishment, if he be found guilty, shall be left to the British Government or its authorities」トシテ第十條ハ右ノ如シ。

6 1.1.1.0 - 27 3844

625

調令附屬ノ條約草案第七條ニ於テ英國法廷ニ於テ及英國人刑事被告人ノ右法廷ニ於テ裁判セラルルキコトヲ決定スルニ依リ And in general, all causes and suits in which British subject in China shall be defendants, shall be tried by the above-named tribunals. 此ノ規定ヲ附キタル。

三 千八百四十三年十月八日虎門ニ於テ署名セラルル英支間追加條約附屬通商章程ニ於テ甫シテ條約ノ明文ヲ以テ治外法權ニ關スル規定ヲ設ケタリ。即チ右通商章程第十三條ニ於テ英支兩國人間混合事件ノ處理及英國人刑事事件ノ管轄權ニ關シ。 Whenever a British subject has reason to complain of a Chinese, he must first proceed to the Consulate and state his grievance.

The Consul will thereupon inquire into the merits of the case, and do his utmost to arrange it amicably. In like manner, if a Chinese have reason to complain of a British subject, he shall no less listen to his complaint and endeavour to settle it in a friendly manner. If an English merchant have occasion to address the Chinese authorities, he shall send such address through the Consul, who will see that the language is becoming; and if otherwise, will direct it to be changed, or will refuse to convey the address. If unfortunately and disputes take place of such a nature that the Consul cannot arrange them amicably, then he shall request the assistance of a Chinese officer that they may together examine into the merits of the case, and decide it equitably. Regarding the punishment of English criminals, the English Govern-

ment will enact the laws necessary to attain that end, and the Consul will be empowered to put them in force; and regarding the punishment of Chinese criminals, these will be tried and punished by their own laws, in the way provided for by the correspondence which took place at Nanking after the concluding of the peace. 規定ニタリ。 支那國全權委員同ニ日本件ニ付公文ニ往復等ヨリ亦實上英國人ノ治外法權的地位ノ享有ニ付了解ブタリ。 門追加條約附屬通商章程第十三條ノ旨ヲ了解明文化スルニ通シテモ、下開條約ニ於テ、 四 英國ガ支那國ノ人間ニ南京條約及虎門追加條約ヲ締結シタル後米國及佛國モ亦英國ノ例ニ倣ヒ支那國ノ人間ニ夫々修好通商條約ヲ締結シタルガ右米支間條約及佛支間條約中ニハ治外法權ニ關シ前記英支間虎門追加條約附屬通商章程ノ規定ニ比シテ、 展詳細ナル規定ヲ設ケタリ。 即チ千八百四十四年七月三日、 米支間盤屋修好通商條約ノ第二十二條ニ於テ、 刑事事件ノ管轄權ニ關シ、 Subjects of China who may be guilty of any criminal act towards citizens of the United States shall be arrested and punished by the Chinese authorities according to the laws of China, and citizens of the United States who may commit any crime in China shall be subject to be tried and punished only by the Consul or other public functionary of the United States thereto authorized according to the laws of the United States; and in order to the prevention of all

1411
controversy and disaffection, justice shall be equitably and impartially administered on both sides. 規定ノ第二十四條未段ニ於テ米支兩國人間混合事件ノ處理ニ關シ。And if controversies arise between citizens of the United States and subjects of China which cannot be amicably settled otherwise, the same shall be examined and decided conformably to justice and equity by the public officers of the two nations acting in conjunction. 規定ノ第二十五條ニ於テ米國人海五間事件及米國人ノ第三國人ノ間ノ混合事件ノ處理ニ關シ。All questions in regard to rights, whether of property or person, arising between citizens of the United States in China shall be subject to the jurisdiction of and regulated by the authorities of their own Government, and all controversies occurring in China between the citizens of the United States and the subject of any other Government shall be regulated by the Treaties existing between the United States and such Governments respectively, without interference on the part of China. 規定ノ第三十六條ニ於テ米國領事ニ於テ米國領事ニ對シテ米國人ノ海五間事件ノ處理ニ關シ。Merchant vessels of the United States lying in the waters of the five ports of China open to Foreign commerce will be under the jurisdiction of the officers of their own Government, who with the masters and owners thereof will manage the same, without control on the part of China.

1412
規定ノ第三十六條ニ於テ米支兩國人間ノ債權取付ニ關シ。The Chinese Government will not hold itself responsible for any debts which may happen to be due from subjects of China to citizens of the United States or for frauds committed by them, but citizens of the United States may seek redress in law, and on suitable representation being made to the Chinese local authorities through the Consul, they will cause due examination in the premises and take all proper steps to compel satisfaction. But in case the debtor be dead, or without property, or have absconded, the creditor cannot be indemnified according to the old system of the cohong so-called. And if citizens of the United States be indebted to subjects of China, the latter may seek redress in the same way through the Consul, but without any responsibility for the debt on the part of the United States. 規定ノ第三十七條ニ於テ米支兩國人間混合事件ノ處理ニ關シ。前記英支間虎門追加條約附屬通商章程第十三條ノ前段及中段ノ同趣旨即チ。Lors qu'un citoyen Français aura quelque sujet de plainte ou quelque réclamation à formuler contre un Chinois, il devra d'abord exposer ses griefs au consul qui, après examen il s'efforcera de l'arranger amiablement. De même, quand un Chinois aura à se plaindre d'un Fran-

gais; le conseil écoutera sa réclamation avec intérêt et cherchera à ménager un arrangement amiable. Mais si dans l'un ou l'autre cas, la chose était impossible, le consul requerra l'assistance du fonctionnaire Chinois compétent, et tous deux après avoir examiné conjointement l'affaire, statueront suivant l'équité. 規定第二十七條 於テ刑事事件ノ管轄權ニ關シ、malheureusement, il s'élève quelque fois ou quelque querelle entre des Français et des Chinois, comme aussi dans le cas où, durant le cours d'une semblable querelle, un ou plusieurs individus seraient tués ou blessés, soit par des coups de feu, soit autrement, les Chinois seront arrêtés par l'autorité Chinoise, qui se chargera de les faire examiner et punir, s'il y a lieu, conformément aux lois du pays. Quant aux Français, ils seront arrêtés à la diligence du consul, et celui-ci prendra toutes les mesures nécessaires pour que les prévenus soient livrés à l'action régulière des lois Françaises, dans la forme et suivant les dispositions qui seront ultérieurement déterminées par le Gouvernement Français. Il en sera de même en toute circonstance analogue et non prévue dans la présente Convention, le principe étant que, pour la répression des crimes et délits commis par eux dans les cinq ports, les Français seront constamment régis par la loi Française. 規定第二十八條 於テ佛國人相互間事件及佛國人ト佛國人ノ間ノ混合事件ノ

一四四

628 1.1.1.0 - 27

處理並ニ佛國商船ニ對スル管轄權ニ關シ前記米支間望厦條約第二十五條及第二十六條ト同趣旨ノ規定即チ Les Français qui se trouveront dans les cinq ports dépendront également, pour toutes les difficultés ou les contestations qui pourraient s'élever entre eux, de la juridiction Française. En cas de différends survenus entre Français et étrangers, il est bien stipulé que l'autorité Chinoise n'aura à s'en mêler d'aucune manière. Elle n'aura pareillement à exercer aucune action sur les navires marchands Français; ceux-ci relèveront que de l'autorité Française et du capitaine, n'auront aucune exception. 規定第二十九條 前記英支間虎門追加條約附屬通商章程第八條、米支間望厦條約第二條並ニ佛支間黃埔條約第六條及第三十五條ハ何レモ一般的最惠國待遇ヲ規定セルヲ以テ治外法權ニ關スル事項モ亦右最惠國條款ノ適用ヲ受ケ從テ前記各條約ニ依リ英米佛三國ノ獲得シタル治外法權ハ統一的ニ體トシテ同ノ内容ヲ有スルニ至ルモシテ前記三條約ハ實ニ支那國ニ於ケル治外法權制度ノ最初ノ基礎ヲ確立シタルモノナリトス。

一四五

3847 1.1.1.0 - 27

六 白國ハ英米佛三國ノ例ニ倣ヒ支那國トノ間ニ通商條約ヲ締結セントシテ印度支那駐在總領事 Lannoy ヲ廣東ニ派シ交涉セシタル處正式條約ノ締結ヲ見ルニ至ラザリシモ交渉ノ任ニ當ルル兩廣總督者及廣東副督憲黃日シ總領事 Lannoy ニ宛テタル千八百四十五年七月二十五日附公信ヲ以テ

REEL No. A-0272

千八百六十六年九月二日ノ獨支間天津條約、千八百六十二年八月十三日ノ葡支間天津條約、千八百六十三年七月十三日丁支間天津條約、千八百六十三年十月六日葡支間天津條約、千八百六十四年十月十日西支間天津條約、千八百六十五年十一月三日白支間北京條約、千八百六十六年十月二十六日伊支間北京條約及千八百六十九年九月二日埃洪支間北京條約之ビナリトス。右諸條約ハ何レモ治外法權ニ關スル規定ヲ包含シタルガ其ノ規定ハ英米佛ト支那國トノ間ノ既存條約ノ規定ヲ模倣シタルモノニシテ新規ノ内容ヲ有スルモノニアラス。(註六)

(註六) 獨支間條約第三十五條乃至第三十九條、葡支間條約第十五條乃至第十七條、丁支間條約第十五條乃至第十七條、西支間條約第六條、西支間條約第十一條乃至第十四條、白支間條約第十六條乃至第二十二條、伊支間條約第十五條乃至第十八條、埃洪支間條約第二十八條乃至第四十條參照。

九〇長髮賊ノ亂中上海居留地内ニ支那人ノ流入夥シテ增加シ當初英米領事等ハ此等支那人ニ對シ實際上或範圍ニ於テ法權ヲ行ヒタルガ千八百六十四年此等居留地内支那人ニ關スル事件ヲ管轄スル特別公會審裁判制度ノ創設ヲ見次デ右會審制度ハ千八百六十八年上海洋涇濱設官會審章程(Rules for the Mixed Court at Shanghai, 1868)ニ制定ニ依リ二層確實ナル基礎ヲ有スルニ至レリ。(註七)

(註七) 上海會審裁判制度ニ關シテ本會審官部ヲ參照。Justice compiled or revised the Rules of the Mixed Court at Shanghai, 1868. 千八百七十六年九月十三日ノ英支間芝罘條約ノ第三節第三項ニ於テ混合事件ニ關シテ「被告主義及會審ノ意義等ヲ明カニセン」トシテ左ノ如キ規定ヲ設ケタリ。

630

It is agreed that whenever a crime is committed affecting the person or property of a British Subject, whether in the interior or at the open ports, the British Minister shall be free to send officers to the spot to be present at the investigation.

Sir Thomas Wade will write a Note to the above effect, to which the Tsung Li Yamen will reply, affirming that this is the course of proceeding to be adhered to for the time to come.

It is further understood that so long as the laws of the two countries differ from each other there can be but one principle to guide judicial proceedings in mixed cases in China, namely, that case is tried by the official of the defendant's nationality; the official of the plaintiff's nationality merely attending to watch the proceeding in the interests of justice. If the officer so attending be dissatisfied with the proceedings, it will be in his power to protest against them in detail. The law administered will be the law of the nationality of the officer trying the case. This is the meaning of the words hu t'ung, indicating combined action in judicial proceedings in Article XVI of the Treaty of Tientsin, and this is the course to be respectively followed by the officers of either nationality.

千八百六十六年九月二日ノ獨支間北京條約ノ第四條ニ於テ混合事件ニ關シテ被告主義及原告所屬國當該官吏ノ會審裁判權等ニ付左ノ如キ規定ヲ設ケタリ。

When controversies arise in the Chinese Empire between citizens of the United States and subjects of His Imperial Majesty, which need to be examined and decided by the public

6 1.1.1.0 - 27 3849

officers of the two nations, it is agreed between the Governments of the United States and China that such cases shall be tried by the proper official of the nationality of the defendant. The property authorized official of the plaintiff's nationality shall be freely permitted to attend the trial, and shall be treated with the courtesy due to his position. He shall be granted all proper facilities for watching the proceedings in the interests of justice. If he so desires, he shall have the right to present, to examine, and to cross-examine witnesses. If he is dissatisfied with the proceedings, he shall be permitted to protest against them in detail. The law administered will be the law of the nationality of the officer trying the case.

一 上述ノ外支那國が千八百七十年代以後ニ於テ締結シタル左記條約中ニモ治外法權ニ關シテ既存諸條約ノ規定ト略同趣旨ノ條項ヲ設ケタリ (註八) (註九)

千八百七十四年六月二十六日ノ秘 (露) 支間天津條約 (第十二條乃至第十四條)

千八百八十一年十月三日伯支間天津條約 (第九條乃至第十一條)

千八百八十六年四月二十五日ノ佛支間天津條約 (第十六條、第十七條)

千八百八十七年十二月三日ノ葡支間北京條約 (第四十七條乃至第五十二條)

千八百九十六年七月二十一日ノ日支間通商條約 (第二十條乃至第二十四條)

千八百九十九年十二月十四日ノ墨支間華府條約 (第十三條乃至第十五條)

千九百零八年四月二十日ノ英支間印度西藏通商章程 (第四條) (註十)

千九百十八年六月十三日ノ瑞 (西) 支間東京條約附屬宣言

(註八) 露國が支那國トノ間ニ締結シタル條約ニ於テ、露國領事ト支那國地方官トノ間ノ協議ニ依リ裁判ノ原則ニ認メ他國ノ條約ニ於ケルト共、趣ヲ異ニスル規定ヲ存シタルガ (千八百五十八年六月十三日ノ露支間天津條約第七條、千八百六十年十一月十四日ノ露支間北京追加條約第八條及第十條、千八百八十二年二月二十四日ノ露支間聖彼得堡條約第十一條) 露支間條約ニ於テモ、一般的發見國條約挿入セザルベシトシ、露支間天津條約第十二條、墨支間華府條約第十三條、葡支間北京條約第四十七條乃至第五十二條、日支間條約及華支間條約ニ關シテハ本章第二節參照

(註九) 日支間條約及華支間條約ニ關シテハ本章第二節參照

一 上述ノ所ハ主トシテ狹義ノ治外法權即チ領事裁判權ニ關スルモノナルガ支那國ニ於ケル治外法權國人ノ領事裁判權ニ依リ一般ニ支那國ノ裁判管轄權ニ服セザルノ外後述ノ如ク原則トシテ支那國ノ課税、警察其ノ他ノ法權ニ服セザルノ地位ヲ有スルニ至ルモノニシテ右ノ如キ治外法權國人ノ地位ノ形成ハ特ニ領事裁判權以外ノ點ニ付テハ永年ニ互ル慣習ニ因ル所勢カラズト雖モ條約ノ成文上ノ根據ヲ缺クモント言フコトヲ得ズ。即チ例ハ (イ) 條約ニ明定セザル obligation 之ヲ課セザルノ原則ヲ明カニシタル佛支間黃埔條約第三十五條 (Il est d'ailleurs entendu que toute obligation non consignée expressément dans la présente Convention, ne saura être imposée aux consuls ou agents consulaires Français, non plus qu'à leurs nationaux) ガル規定及右規定ト同一内容ノ佛支間天津條約第四十條ノ規定 (四) 人ト船舶及財産ノ抑留、強制留置等ノ禁止ノ原則ヲ定メタル米支間望廈條約第三十八條ノ Citizens of the United States, their vessels and property shall not be

subject to any embargo, nor shall they be seized or forcibly detained for any preference of the public service; but they shall be suffered to prosecute their commerce in quiet and without molestation or embarrassment. ナル規定(イ) 財産不可侵ノ原則並ニ船舶ノ抑留及徴發ノ禁止ノ原則ヲ定メタル佛支間黃埔條約第三條ノ Les propriétés de toute nature appartenant a des Français dans les cinq ports seront considérées par les Chinois comme inviolables, et seront toujours respectées par eux. L'autorité Chinoise ne pourra, quoi qu'il arrive, mettre embargo sur les navires Français, ni les frapper de réquisition pour quelque service public ou privé, que ce puisse être. ナル規定及右規定ト同一内容ノ佛支間天津條約第十二條、白支間北京條約第十四條、埃尙支間北京條約第十三條ノ規定等、前述ノ領事裁判權ニ關スル諸條約ノ規定及最惠國條款並ニ實際ノ慣行ト相俟テ支那國ニ於ケル特殊ノ治外法權制度ヲ確立スルニ至リタル素因ナリトス。

第二節 治外法權ニ關スル日支間條約關係ノ變遷

一 明治四年七月二十九日ノ日支間修好條約ハ雙務的平等條約ニシテ支那國ト歐米諸國トノ間ノ前記諸條約ガ片務的平等條約ナルト異ナルモノナルガ治外法權ニ關シテモ歐米諸國トノ條約ニ於ケルト其ノ趣ヲ異ニスル規定ヲ設ケタリ。即チ同條規第八條前段ニ於テ「兩國ノ開港場ニハ彼此何レモ理事官ヲ差置キ自國國民ノ取締ヲナスベシ凡家財產業公事訴訟ニ關係セシ事件ハ都テ其裁判ニ歸シ

何レモ自國ノ律令ヲ按シテ執辦スベシト規定セルガ右ハ所謂雙務的領事裁判權ヲ認ムルモノト解釋スル又同條中段ニ於テ「兩國國民相互ノ訴訟ニハ何レモ願書體ヲ用ユ理事官ハ先理解ヲ加ヘ成丈訴訟ニ及ハサル様ニスヘシ其儀能ハサル時ハ地方官ニ掛合ヒ雙方出會シ公平ニ裁斷スベシ」ト規定セルガ右ハ歐米諸國トノ條約ニ於ケル混合事件ノ處理手續ニ付テノ規定ヲ參酌セルモノナルベキモ雙務的ナル點ニ於テ歐米諸國ト支那國トノ間ノ條約ノ規定ト其ノ趣ヲ異ニセリ。同條約第九條ニ於テ「兩國ノ開港場ニ若シ未タ理事官ヲ置カサル時ハ其人民貿易何レモ地方官ヨリ取締リ世話スベシ若シ罪科ヲ犯サハ本人ヲ捕テ吟味ヲ遂ケ其事情ヲ最寄開港場ノ理事官ヘ掛合ヒ律ヲ照シテ裁斷スベシ」ト規定セルガ右ハ兩國ノ何レカ一方ノ人民ガ所謂理事官ノ置カレザル他方ノ開港場ニ在留スル場合前記人民ハ開港場所在國ノ地方官ノ取締及裁判管轄ニ服スベキ旨ヲ定ムルモノニシテ(但シ人民ノ罪科ヲ犯シタル場合ハ處斷ハ地方官ニ於テ最寄開港場ノ理事官ニ事情ヲ知照シタル上之ヲ爲スベキ旨ノ制限アリ)從テ此ノ點ニ於テハ治外法權ニ之ヲ認メザルモノトス。同條規第十一條前段ニ於テ「兩國ノ商民諸開港場ニテ彼此往來スルニ付テハ互ニ友愛スベシ刀劍類ヲ携帯スル事ヲ得ス違フ者ハ罰ヲ行ヒ刃劍ハ官ニ取上クベシ」ト規定シテ所在國ノ法權ノ行使ヲ認メ又第十三條ニ於テ「兩國ノ人民若シ開港場ニ於テ兇徒ヲ語合盜賊惡事ヲ爲シ或ハ内地ニ潛ミ入り火ヲ付ケ人ヲ殺シ劫奪ヲ爲ス者アラハ各國ニテハ地方官ヨリ嚴ク捕直ニ其次第ヲ理事官ヘ知ラスベシ若シ兇器ヲ用テ

手向ヒセハ何レニ於テモ格殺シテ論無カルヘシ併シ之ヲ殺セシ事情ハ理事官ト出會シテ一同ニ查驗
スヘシ若シ其事内地ニ起リテ理事官自ラ赴キ查驗スル事届キカキアル時ハ其地方官ヨリ實在ノ情由ヲ
理事官ニ照合シテ查照セシムヘシ尤モ紳シテ取リタル罪人ハ各港ニテハ地方官ト理事官ト會合シテ
吟味シ内地ニテハ地方官ニ手ニテ吟味シ其事情ヲ理事官ニ照會シテ查照セシムヘシ若シ此國ノ人民
彼國ニ在テ一揆徒黨ヲ企テ十人以上ノ數ニ及ヒ並ニ彼國人民ヲ誘結通謀シ害ヲ地方ニ作スノ事アラ
ハ彼國ノ官ヨリ早速查拏シ各港ニテハ理事官ニ掛合ヒ會審シ内地ニ於テハ地方官ヨリ理事官ニ照會
シテ查照セシムヘシモ事ヲ犯セシ地方ニ於テ法ヲ正スヘシト規定シテ所定ノ刑事事件ニ付開港場
ニ於テハ地方官ト所謂理事官ト會審ヲ認メ内地ニ於テハ前記第九條ノ場合ト同シク地方官限リ
審判ヲ認メタリ。

二 前記日支間修好條規ハ日清戰爭ノ爲消滅シタル處明治二十八年四月十七日ノ日支間媾和條約第六
條第一項ノ一般的最惠國條款ニ依リ日本國ハ始メテ歐洲諸國ト同一ノ地步ニ於テ支那國ニ對シ所謂
片務の領事裁判制度ヲ認メシメ歐洲諸國ガ支那國ニ於テ有スルト同様ノ治外法權ヲ有スルニ至レ
リ。

前記媾和條約第六條第二項ノ規定左ノ如シ(註一)。

「日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戰ノ爲メ消滅シタルハ清國ハ本條約批准交換ノ後速ニ全權委員ヲ

633 0.1.1.1 a

任命シ日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スヘキコトヲ約ス而シ
テ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ該日清兩國間諸條約ノ基礎ト爲スヘシ
又本條約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ清國ハ日本國政府官吏商業航海陸路交通貿
易工業船舶及臣民ニ對シ最惠國待遇ヲ與フヘシ。

(註一) 日支間媾和條約批准交換ハ明治二十九年五月八日ニ於テ行ハレタリ。

三 明治二十九年七月二十一日ノ日支間通商航海條約ハ領事裁判權ニ關シ特別ノ規定ヲ設ケ又治外法
權一般ニ關シテモ適用アルヘキ最惠國條款ヲ設ケタリ。即チ同條約第二十條ニ於テ「清國ニ在ル日
本國臣民ノ身體財產ニ關スル裁判管轄權ハ當該日本國官吏ニ專屬ス日本國臣民或ハ一切ノ他國臣民
又ハ人民ヨリ日本國臣民並ニ其ノ財產ニ係ル訴訟ハ總テ清國官吏ノ干渉ヲ受クルコトナシ右官吏ニ
於テ審理判決スヘシ」ト規定シ第三十一條ニ於テ「清國官吏又ハ臣民ガ清國ニ在ル日本國臣民ニ對
シ又ハ其ノ財產ニ關シ民事訴訟ヲ起ストキハ日本國官吏ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ(第二項)清國臣
民ニ對シ又ハ其ノ財產ニ關シ清國ニ在ル日本國官吏或ハ臣民ヨリ起ス所ノ民事訴訟ハ總テ清國官吏
ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ(第二項)」ト規定シ第二十二條ニ於テ「清國ニ於テ犯罪ヲ被告トナリタル
日本國臣民ハ日本國ノ法律ニ依リ日本國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處罰スヘシ
(第二項)清國ニ在ル日本國臣民ニ對シ犯罪ノ被告トナリタル清國臣民ハ清國ノ法律ニ依リ清國官吏

6 1.1.1.0 - 27 3852

之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處罰スヘシ(第二項)ト規定シ第三十三條ニ於テ「清國
臣民ハ日本國臣民ニ對シテ負債ヲ償辦セズ又ハ詐欺逃亡スルトキハ清國官吏之ヲ逮捕シ其ノ負債ヲ
償還セシムルコトヲ務ムヘシ日本國官吏ニ於テモ日本國臣民カ清國臣民ニ對シテ詐欺逃亡シ又ハ其
ノ負債ヲ償辦セザルモノハ處分スルコトヲ務ムヘシ」ト規定シ第二十四條ニ於テ「清國ニ在ル日本
人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辦セズシテ詐欺逃亡シタル者清國ノ内地ニ遁レ清國臣民ノ住居若ハ
清國船舶中ニ潛伏スルトキハ清國官吏ハ日本國領事ヨリ請求次第日本國官吏ニ之ヲ引渡スヘシ(第
一項)又清國ニ在ル清國人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辦セズシテ詐欺逃亡シタル者清國ニ在ル日
本國臣民ノ住居若ハ清國領海ニ於ケル日本國船舶中ニ潛伏スルトキハ清國官吏ヨリ日本國ニ請求次
第之ヲ引渡スヘシ(第二項)」ト規定シ又第三條ニ於テ「大日本國皇帝陛下ハ外國通商ノ爲メニ現
開カレ若ハ將來開カレヘキ清國ノ港市ノ内日本國ノ利害ニ必要ナリト認ムル場所ニ總領事、領事、
副領事及代辦領事ヲ駐在セシムルコトヲ得(第一項)右領事官ハ清國官吏ヨリ相當ノ禮遇ヲ受ケ且
最惠國ノ領事官ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキ總テノ資格、職權、裁判管轄權、特權及免除ヲ享
有スヘキモノトス(第二項)」ト規定シ第二十五條第二項ニ於テ「且日本國ノ政府及臣民ハ大清國皇
帝陛下ヨリ他國ノ政府又ハ臣民ニ現ニ附與シ又ハ將來附與スヘキ一切ノ特權、免除及利益ヲ享有ス
ヘキモノトヲ特ニ茲ニ規定ス」ト規定シタリ(註二)

一五六

634

四 明治四十二年九月四日ノ日支間島協約ハ關門江北地方雜居地區域内懸地居住ノ韓民ノ地位ニ關
シ特別ノ規定ヲ設ケ即チ第四條ニ於テ「關門江北地方雜居地區域内懸地居住ノ韓民ハ清國ノ法權ニ
服從シ清國地方官ノ管轄裁判ニ歸ス清國官吏ハ右韓民ヲ清國人ト同様ニ待遇スヘク納稅其ノ他一切
行政上ノ處分モ清國民ト同様タルヘシ右韓民ニ關係スル民事刑事ノ一切ノ訴訟事件ハ清國官吏ニ於
テ清國ノ法律ヲ按照シ公平ニ裁判スヘク日本國領事官又ハ其ノ委任ヲ受ケタル官吏ハ自由ニ法廷ニ
立會フコトヲ得但シ人命ニ關スル重案ニ付テハ須ク先ツ日本國領事ニ知照スヘキモノトス日本國領
事官ニ於テ若法律ニ按セスシテ判斷セル廉アルコトヲ認メタルトキハ公正ノ裁判ヲ期セムガ爲別ニ
官吏ヲ派シテ覆審スヘキコトヲ清國ニ請求スルコトヲ得」ト規定シタリ(註三)(註四)

(註三) 明治四十三年八月二十二日ノ日韓併合條約ニ依リ韓民ハ日本國臣民トナリタル結果間島協約ニ規定シタル關門江北
地方雜居地區域内懸地居住ノ韓民ノ地位ニ變更ナラズ此等韓民モ一般日本國臣民ト同様治外法權ヲ享有スルコトナリ
又大正四年五月二十五日ノ日支間南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約ハ前記懸地居住ノ朝鮮人ニモ通用セラルコトナリ
又大正四年五月二十五日ノ日支間南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約ハ前記懸地居住ノ朝鮮人ニモ通用セラルコトナリ
(註四) 一千八百八十二年(明治十五年)ノ鮮支間商民水陸貿易章程ハ第二條ニ於テ支那國ハ朝鮮國ニ於テ領事裁判權ヲ有スル
旨ヲ定メタル一方支那國ニ在ル朝鮮人ハ支那國ノ裁判權ニ服スヘキ旨ヲ定メタルガ(元)朝鮮人ニシテ支那國ノ裁判ニ不服

一五七

3853

六 前記日支間諸條約中日支間修好條規、間島協約並、南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ハ日支間ニ
 現存セザルモノナル言テ俟タザル所ニシテ日本國ガ現ニ支那國ニ於テ有スル治外法權ハ主トシ

五 大正四年五月二十五日ノ日支間南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ハ第二條乃至第四條ニ於テ南滿
 洲ニ於ケル日本國臣民ノ土地商租及居住往來營業ノ自由並ニ東部內蒙古ニ於ケル農業及附隨工業ノ
 日支人合辦經營ヲ認ムルト共ニ治外法權ニ關シ第五條ニ於テ前二條ノ場合ニ於テ日本國臣民ハ例
 記ニ依リテ下附セラレタル旅券ヲ地方官ニ提出シ登錄ヲ受ケ又支那國警察法令及課税ニ服スヘシ(第
 二項)民刑訴訟ハ日本國臣民被告タル場合ニハ日本國領事官ニ於テ又支那國國民被告タル場合ニハ
 支那國官吏ニ於テ之ヲ審判シ互ニ員ヲ派シ臨席傍聽セシムルコトヲ得但シ土地ニ關スル日本國臣民
 及支那國國民間ノ民事訴訟ハ支那國ノ法律及地方習慣ニ依リ兩國ヨリ派シ共同審判スヘシ(第
 二項)將來同地方ノ司法制度完全ニ改良セラレルトキハ日本國臣民ニ關スル一切ノ民刑訴訟ハ完全
 ニ支那國法廷ニ歸スヘシ(第三項)ト規定セテ(註五)ノ同條ニ於テハ(註六)ノ條ニ依リ日本國臣民ハ例

(註五) 南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約附屬交換公文ニ依リ右條約第五條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服從スベキ警察法
 令及課税ノ支那國官憲ニ於テ日本國領事官ト協同シ上施行スベキトナリ居レハ協同ニ實際止テ又支那國
 ノ種々ノ妨害ノ爲同條約ノ規定セル土地商租ノ居住往來營業ノ自由、農業及附隨工業ノ合辦經營モ充分ニ保障ナル實行チ
 見ルニ至ラザルニ至ラズ

(註六) 協同ニ依リ日本國領事官ト協同シ上施行スベキトナリ居レハ協同ニ實際止テ又支那國
 令及課税ノ支那國官憲ニ於テ日本國領事官ト協同シ上施行スベキトナリ居レハ協同ニ實際止テ又支那國
 ノ種々ノ妨害ノ爲同條約ノ規定セル土地商租ノ居住往來營業ノ自由、農業及附隨工業ノ合辦經營モ充分ニ保障ナル實行チ
 見ルニ至ラザルニ至ラズ

635

テ前記日支間通商條約ノ規定ニ依リテラレモノトス。...

第三節 治外法權ニ關スル日支間條約關係ノ現狀

第一款 緒言

一 我國ヲ初メ歐米諸國ガ現ニ支那國ニ於テ有スル治外法權ハ諸般ノ條約及慣行ニ基ク種々ノ特權、
 特典及免除ヲ包含スルモノナル處支那國ニ於ケル治外法權ノ觀念ヲ明カニセンガ爲ニハ其ノ具體的
 内容タルベキ諸種ノ特權、特典及免除ニ付各別ニ考察ヲ加フルヲ便トス(註一)。

(註一) 支那國ニ於ケル治外法權ノ統一的ニ觀察シ之ニ付最モ重要ナル定義ヲ與フルコトノ至難ナルモノトハ勿
 論多小ナリト本問題ノ研究ヲ試ミタル者ノ弊シク遺憾スル所ナリ。所謂治外法權ノ内容タルベキ諸種ノ特權、特典及免
 除ノ各般ニ巨ク普遍的ナルベキ抽象的觀念ヲ求メテ治外法權ノ實質的定義ヲ定ム之ニ依リテ治外法權關係ヲ演繹的ニ説明
 セントスルハ困難ニ阻、且危險アルヲ以テ吾人ハ治外法權ノ實質的定義ハ概念構成ヲ避ケ寧ろ治外法權制度ハ具體的內
 容ヲ抽出シテ說明チ加ヘ以テ複雜性ヲ有スル治外法權ノ全貌ヲ寫真セシムルノ方法ヲ採ラントス。

二 治外法權ノ具體的内容ヲ說明スルニ先テ一言シ置クヲ要スルハ治外法權ト最惠國條款トノ關係
 ニシテ我國ハ日支間通商條約第三條第一項及第二十五條ノ最惠國條款ニ依リテ治外法權ニ關シテモ他
 國ノ支那國ニ於テ有スル權利利益ニ均霑シ得ルモノナルヲ以テ我國ノ支那國ニ於テ有スル治外法權
 ノ内容ハ直接ニ日支間條約ニ依リ規定セラレルモノノ外他ノ總テノ治外法權國ノ享有スル特權、特
 典及免除ヲ包含スルモノナルコトナリトス(註二)。

(註二) 治外法權ノ存在ノ結果治外法權國ガ現實ニ支那國ニ於テ行使スル管轄權ノ範圍ハ其ノ管轄權行使ノ應得等ノ國內法的

3854

關係ハ各國ニ依リ必シモ同一ナラザルモ支那國下ノ間ノ國際法的關係ヨリスレバ各國ノ有スル治外法權ハ最惠國條款ノ效力ニ依リ同一ノ内容ヲ有スル統一的一體トシテ觀察スルニ得ルモノトス。

第二款 領事裁判權

一 我國ガ支那國ニ於テ有スル治外法權ノ中所謂領事裁判權ガ其ノ最モ顯著ニシテ本來ノ内容ヲ爲スモノナルコト疑フ容レズ(註二)。

明治四年七月二十九日ノ支間修好條規ニ於テハ原則トシテ所謂雙的領事裁判制度ヲ認メタルガ右修好條規ハ日清戰爭ノ爲消滅シ明治二十八年四月十七日ノ支間媾和條約ニ於テ支那國ニトリ片務的ナル一般的最惠國待遇ノ規定セラレタル結果我國ハ茲ニ初メテ泰西諸國ノ支那國ニ於テ有スル領事裁判權ニ均霑スルコトナリ而シテ明治二十九年七月二十一日ノ支間通商條約ニ依リ領事裁判權ニ關シテ特別ノ規定セラレ又領事裁判權ニ關シテモ適用アルべき最惠國待遇ノ規定ヲ見ルニ至リタルハ既述ノ通ナリ(註三)。

(註一)「領事裁判權」ナル語ハ二様ノ意義ニ用ヒラル。一ハ「國」(例ハ日本國)ガ裁判權行使ニ關シテ他國(例ハ支那國)ニ對シテ有スル一定ノ條約上ノ權利ヲ指稱スル場合ニシテ他國右條約上ノ權利ヲ存在ナキ前提トシテ其ノ權利國(例ハ日本國)ハ義務國(例ハ支那國)ノ領域内ニ於テ行使スル裁判權其ノモノヲ指稱スル場合ナリ。前ノ場合ノ領事裁判權ハ國際法上ノ觀念ニシテ國際法上所謂獲得權一種ニ屬シ後ノ場合ノ領事裁判權ハ國內法上ノ觀念ニシテ國家統治權ノ一作用ニ外ナズ。

(註二)支那國ニ於ケル「治外法權」ハ領事裁判權トハ殆ンド同一ノ意義ニ用ヒラル場合尠カラズ。千九百二十一年ノ「前清政府會議決議」ニ基キ支那國ニ於ケル「治外法權」ニ關スル調査報告ノ任務ヲ以テ組織セラレタル委員會ノ報告書ニ於テモ

三 「領事裁判權」ニ關シテ事項ヲ取扱ヒタリ。...

二 一般國際法ノ原則ヨリスレバ各國家ハ自國ノ領域内ニ於テハ完全ニ其ノ裁判權ヲ行使スルコトヲ得ルモ他國ノ領域内ニ於テハ其ノ裁判權ヲ行使スルコトヲ得ザルモノトス(註四)。然ルニ支那國ハ自國ノ領域内ニ於テ他ノ普通ノ國家ノ如ク完全ニ其ノ裁判權ヲ行使スルコトヲ得ザルト共ニ他國

(治外法權國)ハ一定ノ範圍ニ於テ支那國ノ領域内ニ於テ其ノ裁判權ヲ行使スルコトヲ得ルモノトス。之レ即チ領事裁判權ノ效果ニシテ從テ領事裁判權ノ範圍ヲ示サンガ爲ニハ先ヅ支那國ハ自國ノ領域内ニ於テ如何ナル範圍ニ於テ其ノ裁判權ヲ行使ヲ制限セラルルヤ又他國(治外法權國)ハ支那國領域内ニ於テ如何ナル範圍ニ於テ其ノ裁判權ヲ行使スルコトヲ得ルヤノ點ヲ明カニスルヲ要ス。而シテ右ノ點即チ裁判上ノ國際管轄ニ關シテ支間現行條約ハ支那國ト他國トノ間ノ多クノ條約ニ於ケルハ同様被告主義ノ原則ヲ採用スルモノニシテ概言スレバ日本人ヲ被告トスル民事事件ニ付テハ支那側ニ於テ管轄權ヲ有セスシテ日本側ニ於テ管轄權ヲ有スルモノトス。今之ヲ條約ノ規定ニ照シテ説明スレバ左ノ如シ(註五)(註六)。

(イ)日本人ヲ原告及被告トスル民事事件ニ付テハ日本側ニ於テ管轄權ヲ有シ支那側ニ於テ管轄權ヲ有セス(日支間通商條約第二十條)。

S 1.1.1.0 - 27 3855

(ロ) 第三國人ヲ原告トシ日本人ヲ被告トスル民事事件ニ付テハ日本側ニ於テ管轄權ヲ有シ支那側ニ於テ管轄權ヲ有セズ(日支間通商條約第二十條)。
 (ハ) 支那人ヲ原告トシ日本人ヲ被告トスル民事事件ニ付テハ日本側ニ於テ管轄權ヲ有シ支那側ニ於テ管轄權ヲ有セズ(日支間通商條約第二十一條第一項)。
 (ニ) 日本人ヲ原告トシ支那人ヲ被告トスル民事事件ニ付テハ支那側ニ於テ管轄權ヲ有シ日本側ニ於テ管轄權ヲ有セズ(日支間通商條約第二十一條第二項)。
 (ホ) 日本人ヲ被告トスル刑事事件ニ付テハ被害者ガ支那人又ハ第三國人ナル場合ト雖モ總テ日本側ニ於テ管轄權ヲ有シ支那側ニ於テ管轄權ヲ有セズ(日支間通商條約第二十二條第一項)。
 (ヘ) 支那人ヲ被告トスル刑事事件ニ付テハ被害者ガ日本人ナル場合ト雖モ支那側ニ於テ管轄權ヲ有シ日本側ニ於テ管轄權ヲ有セズ(日支間通商條約第二十二條第二項)。
 (註四) 外國ニ在ル國家ノ元首、外交使節、軍隊及軍艦等ニ對シテハ一般國際法上原則トシテ所在國ノ裁判管轄權ガ及バザルコト致テ管轄權ヲ有セズ。
 (註五) 日本人ニシテ支那國ノ海關、郵務、國稅等ノ官署ニ勤務スル者ハ領事裁判權ノ關係ヨリ見レバ他ノ一般日本人ト異ナル地位ニ立ツモノニアラス。
 (註六) 日本人ヲ原告トシ第三國人ヲ被告トスル民事事件及第三國人ガ被告ニシテ日本人ガ被害者タル場合ノ刑事事件ニ付テハ日支間條約中規定スル所ナキモ實際ノ慣行ハ右ノ如キ場合ニ於テモ被告主義ニ依リ居レリ。

ナリ。換言スレバ日本人ヲ被告トスル一切ノ民事事件ニ付日本側ニ於テ裁判管轄權ヲ有スルコトハ開放地タルト内地タルト問ハズ又租界ノ内外及自國又ハ外國ノ專管租界乃至共同租界タルト否ト問ハズ支那國ノ全領域ニ亘リテ同様ナルモノトス(註七)(註八)。
 (註七) 明治四年ノ日支間條約ニ於テハ領事ノ設置ナキ開港場及内地ニ於テハ領事裁判權ヲ確メザリシト又明治四十二年ノ日支間條約ニ於テハ開江北部租界居住ノ韓民ハ支那側ノ法權ニ服スルコト既述ノ如シ(本章第二節參照)。
 (註八) 以前ノ滿洲ニ於ケル鐵道附屬地及北京公使館區域ニ於テモ領事裁判權ノ關係ハ他ノ地域ニ於ケルト異ナラス。但シ租借地ニ於テハ租借國ノ裁判權ガ排他的ニ行ハルモノトス。
 四 領事裁判制度ニ於テ其ノ裁判機關ノ組織及權限、裁判ノ準則タルベキ手續法規及實體法規等ヲ如何ニ定ムルヤハ條約ニ別段ノ規定ナキ限り總テ領事裁判權ヲ有スル國ノ自由ニ定メ得ベキモノトス。蓋シ一國(例ヘバ支那國)ガ他國(例ヘバ日本國)ニ對シ裁判權ノ行使ヲ認ムルハ反對ノ特約ナキ限り右裁判權行使ノ實行上必要ナル一切ノ措置ヲ執リ得ルノ權能ヲ認ムルモノト解セザルヲ得ザルヲ以テナリ(註九)(註一〇)。
 (註九) 日支間通商條約第二十二條第一項ニ於テハ日本人刑事被告人ハ「日本國ノ法律ニ依リ」處罰セラルベキ旨ヲ定メ居ルニ拘ラズ第二十二條ニ於テ日本人ヲ被告トスル民事事件ノ裁判ニ付特ニ「日本國ノ法律ニ依リ」之ヲ爲スベキ旨ヲ明示シ居ラザルハ民事事件ニ付テハ「日本國ノ法律」ニ依ラズトノ趣旨ト解スルヲ得ズ。
 (註一〇) 領事裁判ノ準則タルベキ法規ハ領事裁判ヲ行フ國ノ自由ニ定メ得ルノ原則トスルコト本文所載ノ通ナルガ條約ニ於テ特ニ反對ノ特約ヲ爲サザルトキハ之ニ從フベキコト旨ヲ俟タズ。大正四年ノ日支間滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ニ

於テハ土地ニ關スル日支兩國人間ノ民事訴訟ハ支那國ノ法律及地方慣習ニ依リ共同裁判スルモ其旨定メタリ

五 支那國ニ於ケル領事裁判制度ハ前述ノ如ク條約上ノ根據ヲ有スルモノナルガ我國ニ於テハ明治三十

二年法律第七十號「領事官ノ職務ニ關スル法律」中ニ於テ領事裁判ニ關スル現行國內制度ノ根本

ヲ定メ(註二)其ノ後滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル法律(明治四十四年法律第五十二號)「間島

ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル法律(明治四十四年法律第五十一號)及「南部支那ニ於ケル領事官

ノ裁判ニ關スル法律(大正十年法律第二十五號)等ノ制定ヲ見タリ。

(註一)明治十五年刑法治罪法施行以前ノ時代ニ於テハ支那國及朝鮮國在勤領事ハ領事ノ名義ヲ以テ裁判事務ヲ處理シ又

同法施行後ハ判事兼任ノ上(書記生又ハ屬官ノ内ニテ檢察官兼任)裁判事務ヲ處理シ而シテ右兩時代ニ於テハ裁判事務ノ處

理ニ付テハ判事兼任ニ依リテ處理シ來リタル處明治二十一年勅令第七十一號「清國並朝鮮國駐在領事裁判規則」制定ヲ見ルニ至リ前

記兼任ノ制ハ廢止セラレタル共ニ裁判事務ノ處理ニ關スル基本ノ準則定メラレタルガ右勅令ハ現行ノ「領事官ノ職務ニ關ス

ル法律」ニ依リ廢止セラレタリ。

六 我現行制度ニ依レバ所謂領事裁判權ヲ行フコトヲ得ル者ハ領事官ニ限リ(註二)而シテ茲ニ所謂

領事官トハ(一)總領事館又ハ領事館ノ長タル總領事及領事並ニ其ノ代理(二)總領事館又ハ領事館ノ

長ニ非ザル總領事、領事、副領事及領事官補ニシテ特ニ外務大臣ノ指定スルモノ(三)總領事館分館

主任、領事館分館主任、總領事館出張所主任及領事館出張所主任ニシテ特ニ外務大臣ノ指定スルモノ

ニシテ所謂「領事官ノ職務ニ關スル法律」第六條及「領事官職務規則」第十五條ノ(一)尙右

ニ列擧シタル者以外ノ總領事館分館主任、領事館分館主任、總領事館出張所主任及領事館出張所主

任ハ刑事ノ訴訟事件ニ關スル證據調ニ限リ所謂領事裁判事務ヲ行フコトヲ得(「領事官職務規則」第

十五條ノ(二)第二項)。

(註二)明治十五年刑法治罪法施行後明治二十一年勅令第七十一號「清國並朝鮮國駐在領事裁判規則」ノ制定ニ至ル迄ノ間

ハ領事官ノ判事兼任ノ上裁判事務ヲ處理シ來レド前述ノ通りナリ。

大正十二年以來領事裁判事務ニ從事スル者ハ特別ノ素養アル者ヲ以テ之ニ充ツルコトナリ之ガ爲

大正十二年勅令第三百八十七號「領事官及外務書記生ノ特別任用ニ關スル件」ノ制定ヲ見タルガ右

勅令ニ依リ訴訟事件及非訟事件ニ關スル事務並ニ登記事務ニ從事スル領事官ハ裁判所構成法ニ依リ

判事又ハ檢察官タル資格ヲ有スル者ノ中ヨリ特ニ之ヲ任用スルコトヲ得又前記事務ニ從事スル外務書

記生ハ裁判所構成法ニ依リ裁判所書記タル資格ヲ有スル者ノ中ヨリ特ニ之ヲ任用スルコトヲ得ルモ

ノトス。

七 我現行法ニ依レバ領事裁判事務ニ從事スル前記領事官ハ訴訟事件並ニ非訟事件ニ關スル事務及登

記事務ヲ行フモノトス(「領事官ノ職務ニ關スル法律」第六條)。(舊法タル明治二十一年勅令第七十

一條)「清國並朝鮮國駐在領事裁判規則」ニ於テハ領事裁判所ニ於テ取扱フべき事務ヲ民事訴訟及公

訴私訴ニ限定シ非訟事件ニ關スル事務及登記事務ニ關シ規定スル所ナカリシモ法典實施ノ結果トシ

テ訴訟事件ノ外ニ別ニ非訟事件ナルモノヲ生ジ且從前ノ登記事務以外ニ各種ノ登記事務ヲ生ジタル

S 1.1.1.0 - 27 3857

638

REEL No. A-0272

ヲ以テ現行法タル明治三十二年法律第七十號「領事官ノ職務ニ關スル法律」ニ於テハ從前領事官ノ取扱ヒタル民刑訴訟事件ノ外領事官ヲシテ非訟事件ニ關スル事務及登記事務ヲモ取扱ハシムルコトトシタリ。

八 我領事裁判所ハ單獨ノ裁判所ニシテ原則トシテ地方裁判所及區裁判所ノ職務ヲ行フモノトス
一「領事官ノ職務ニ關スル法律」第七條。即チ第一審トシテ凡テノ民事訴訟(但皇族ニ對スル民事訴訟ヲ除ク)ヲ管轄シ又第一審トシテ大審院ノ特別權限ニ屬セザル刑事訴訟ヲ管轄スレドモ刑事ニ關シテハ特別ノ制限アリ。刑事ニ關スル特別ノ制限ハ(イ)領事官ハ死刑又ハ無期若ハ短期一年以上ノ懲役若ハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ單ニ豫審ヲ爲スニ止マリ公判ヲ爲スヲ得ザルコト(ロ)領事官ノ管轄ニ屬スル刑事ニ關シテ國交上必要アルトキハ外務大臣ハ其ノ事件ヲ管轄スベカラザルコトヲ領事官ニ命ジ且被告人ヲ内地又ハ殖民地ノ監獄ニ移送セシムルヲ得ルコトニ在リ。(「領事官ノ職務ニ關スル法律」第八條乃至第十條、「南部支那ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル法律」第四條及第五條、「滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル法律」第三條、「間島ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル法律」第二條及第三條(註一三)。

(註一三)「領事官ノ職務ニ關スル法律」、「滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル法律」及「南部支那ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル法律」ニ於テハ領事官ノ管轄ニ屬スル刑事事件ニ關シテ外務大臣ニ於テ「國交上必要アリト認ムルトキハ」其ノ事件ヲ管轄スベカラザルコトヲ命ジ且被告人ヲ内地又ハ殖民地ノ監獄ニ移送セシムルヲ得ルコトニ在リ。

九 我現行法ニ依レバ領事官ノ豫審ヲ爲シタル罪ノ公判及領事裁判ニ對スル上訴ヲ管轄スル裁判所ハ領事ノ駐在地方ニ依リ即チ滿洲ニ於ケルト間島ニ於ケルト南部支那ニ於ケルト南部支那以外ノ支那ニ於ケルトニ依リ夫々關東廳法院、朝鮮總督府法院、臺灣總督府法院及内地裁判所ナリトス(「滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル法律」第二條及第四條、「間島ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル法律」第一條第四條及第五條、「南部支那ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル法律」第二條第三條、「領事官ノ職務ニ關スル法律」第九條及第十二條)。

一〇 我現行法タル「領事官ノ職務ニ關スル法律」第三條ハ領事官其ノ他本法ニ依リテ職務ヲ行フ者ハ法令及條約ノ規定ニ從テ其ノ職務ヲ行フベキ旨ヲ規定シ又同法第七條ハ領事官ハ法令條約及慣例ニ依リテ管轄セザル範圍ニ於テ地方裁判所及區裁判所ノ職務ヲ行フ旨ヲ規定ス。而シテ前記法律第三條理由書說明ニ依レバ「領事官及本法ニ依リテ檢察、書記又ハ執達吏ノ職務ヲ行フ者ハ其ノ職務ヲ行フニ當リ之ニ關スル條約ノ規定ニ遵據スルト同時ニ條約ニ抵觸セザル範圍内ニ於テ帝國ノ法律命令ニモ亦必ス準據スルヲ要スルモノトス。例ヘバ「領事裁判ヲ行フニハ刑法民法商法訴訟法等ヲ適用シ非訟事件ヲ處理スルニハ非訟事件手續法等ニ依リ登記事務ヲ取扱フニハ登記法不動産登記法等ニ依リ執達又ハ公證ヲナスニハ執達吏規則公證人規則等ニ依ルベキカ如キ是レナリ云々」トアリテ本法立

案ノ建前ハ領事裁判所ニ於テハ原則トシテ内地ノ法令ヲ適用スベキモノトスルニ在リト解セラル。然レドモ實際ニ於テハ領事裁判地域ニ適用セラレベキ法令ノ範圍ニ付疑義ヲ生ズルモノ尠カラズシテ右法令ノ範圍ヲ明確ニスルコトハ領事裁判ニ關スル我現行法制ノ改正上考慮スベキ點ノ一ナトリ

第三款 會審及觀審制度

一 中支及南支ニ於ケル居留地設定ニ關スル日支間取極ニ於テ居留地内ノ支那人ヲ當事者トスル一定ノ事件ニ關シ日本領事ノ會審權乃至觀審權ヲ認メタリ。即チ
(イ) 杭州日本居留地取極書(明治二十九年九月二十七日調印) 第八條ニ於テ居留地内ノ支那人ニシテ行跡疑フベク身分ヲ辨ヘズ若ハ法規ニ違反スルモノアラバ支那國地方官ヨリ日本領事官ニ通知シ又ハ日本領事官ヨリ支那地方官ニ通知シ双方立會取調(會同査確)ノ上支那國地方官ヨリ處罰スベク勝手ニ庇護縱容スルコトヲ得ズトシ、杭州日本居留地追加取極書(明治三十年五月十三日調印) 第五條ニ於テ支那國地方官ハ日本領事官ト商議ノ上居留地内ニ立會裁判所(會審公堂)ヲ設クベク其ノ規則ハ總テ上海ノ例ニ倣フベシトシ、杭州居留地ニ於ケル風俗治安ノ取締ニ關スル日支交換公文(明治三十年五月十三日附)ニ於テ居留地内ニテ私カニ軍器火藥ヲ販賣シ及風俗ヲ擾亂シ總テ治安ヲ害スル業ヲ爲シ規則ヲ守ラザル者アリテ其ノ支那人ナルトキハ前記杭州居留

地取極書第八條ニ照シテ處分スベシトセリ。

(ロ) 蘇州日本居留地取極書(明治三十年三月五日調印) 第三條ニ於テ居留地内居住ノ支那人ニ關スル訴訟事件及支那國地方官ノ當然取扱フベキ事項ハ成ルベク上海租界洋涇會審章程ニ依リ之ヲ辦理スベク支那國ハ居留地内ニ會審公堂ヲ設定スベシトセリ。

(ハ) 漢口日本居留地取極書(明治三十一年七月十六日調印) 第五項ニ於テ居留地内支那人ニシテ行跡疑フベク身分ニ安ンズル規則ヲ遵奉セザルモノアルトキハ支那國地方官ヨリ日本領事ニ照會シ又ハ日本領事ヨリ支那國地方官ニ照會シ立會取調(會同査確)ノ上支那國地方官ヨリ處罰スベシトシ、又第十項ニ於テ居留地内ニ在ル支那國ニ領事ヲ派駐セザル外國ノ人民若ハ支那人ノ訴訟ハ支那國官吏ヨリ取扱員ヲ派シテ居留地内ニ於テ取捌クベク若シ領事ヲ派遣セザル外國ノ人民並ニ日本人若ハ其ノ他ノ外國人ニシテ支那人ヨリ受ケタル不法ノ行為ニ對シテ告訴スル場合又ハ支那人ノ居留地内ニ於テ規則ニ違反セシ場合ニハ支那國官吏ハ日本領事若ハ領事ノ派出スル官員ト立會取調(會審)ヲナスベク若シ支那國裁判官ノ判決不條理ナルトキハ日本領事ヨリ江漢關監督ニ照會シテ覆審スベク重大ナル事件アルトキハ地方官之ヲ取扱ヒ兩國交渉事件ハ條約ニ依リ處分スベシトセリ。

(ニ) 沙市日本居留地章程(明治三十一年八月十八日調印) 第十五條ニ於テ支那國地方官ハ日本領事

官下商議シ居留地内ニ立會裁判所(會審衙門)ヲ設クベク其ノ規則ハ上海ノ例ニ倣フベシトセリ。

一七〇

(ホ) 福州日本專管居留地取極書(明治三十二年四月二十八日調印)第八條ニ於テ居留地内支那人ニシテ行跡疑フベク身分ヲ辨ヘズ若ハ法款ニ背反スルモノアラバ支那國地方官ヨリ日本領事官ニ又ハ日本領事官ヨリ支那國地方官ニ通知シ立會取調(會同査確)シ上支那國地方官ヨリ處罰スベク又居留地内ニ在ル支那國領事ヲ派遣セザル外國人民若ハ支那人ノ訴訟ハ支那國官吏ヨリ取扱員ヲ派シテ居留地内ニ於テ取捌クベク若シ領事ヲ派遣セザル外國ノ人民竝ニ日本人民若ハ其ノ他ノ外國人ニシテ支那人ヨリ受ケタル不法ノ行為ニ對シテ告訴スル場合又ハ支那人ノ居留地内ニ於テ規則ニ違反セシ場合ニハ支那國官吏ハ日本領事若ハ領事ノ派出セル官吏ト立會取調(會審)ヲナスベク若シ支那國裁判官ノ判決不條理ナルトキハ日本領事ヨリ辦理洋務道臺ニ照會シテ覆審スベク立會裁判所(會審公堂)ハ支那國政府ヨリ何時タリトモ之ヲ建設スルコトヲ得ベク未ダ立會裁判所ヲ設ケザル以前ノ訴訟事件ハ猶ホ日本領事ヨリ地方官ニ通知シテ審判スルカ或ハ領事ヨリ期日ヲ定メ地方官衙門ニ立會審判(觀審)スベク若シ地方官ヨリ差役ヲ派出シテ居留地ニ赴キ犯罪者ヲ捕縛セントスルトキハ證票ヲ領事ニ示シ領事ノ檢印ヲ得テ領事ノ派出セル巡査ト共同捕縛スベク尙立會裁判所設置ノ後ハ別ニ居留地立會裁判規則ヲ制定シテ審判スベシトセリ。

6588 641

(ニ) 厦門日本專管居留地追加取極書(明治三十三年一月二十五日調印)第九條ニ於テ居留地内ニ在ル支那人ニシテ行跡疑フベク身分ヲ辨ヘズ若ハ法律規則ニ違反スルモノアラバ支那國地方官ヨリ日本領事ニ又ハ日本領事ヨリ支那國地方官ニ通知シ立會取調(會同査確)シ上支那國地方官ヨリ處罰スベク又居留地内ニ在ル支那國領事ヲ派遣セザル外國人民若ハ支那人ノ訴訟ハ支那國官吏ヨリ取扱員ヲ派シテ居留地内ニ於テ取捌クベク若シ領事ヲ派遣セザル外國ノ人民竝ニ日本人民若ハ其ノ他ノ外國人ニシテ支那人ヨリ受ケタル不法ノ行為ニ對シテ告訴スル場合又ハ支那人ノ居留地内ニ於テ法律規則ニ違反セシ場合ニハ支那國官吏ハ日本領事若ハ領事ノ派出セル官吏ト立會取調(會審)ヲ爲スベク若シ支那國官吏ノ判決不條理ナルトキハ日本領事ヨリ道臺ニ照會シテ覆審スベク若シ支那國地方官ヨリ差役ヲ派シテ居留地内ニ赴キ犯罪者ヲ捕縛セントスルトキハ證票ヲ日本領事ニ示シ領事ノ檢印ヲ得テ領事ノ派出セル巡査ト共同捕縛スベク日本人ハ犯罪者ヲ勝手ニ庇護隱匿スルコトヲ得ズ尙居留地立會裁判規則(租界會審公堂規則)ハ別ニ制定スベシトセリ。

(ト) 重慶日本專管居留地取極書(明治三十四年九月二十四日調印)第三條ニ於テ若シ支那人沿岸ノ崖地及崖下ノ沙洲ノ道筋又ハ他ノ道路ニ於テ事端ヲ生ズル者アルトキハ上海立會裁判所規程ニ照シ處分スベク私ニ拘禁凌虐欺侮スルコトヲ得ズトシ第十七條ニ於テ居留地内ニ在ル支那國領事ヲ派駐セザル外國ノ人民若ハ支那人ノ訴訟ハ支那國地方官ニ於テ受理審判スベク又領事ヲ派駐

一七一

6 1.1.1.0 - 27 3860

セザル外國ノ人民並ニ日本人民若ハ其ノ他ノ外國人ニシテ支那人ヨリ受ケタル不法ノ行爲ニ對シ
 起訴シタル場合又ハ支那人ガ居留地内ニ於テ規則ニ違反シタル場合ニハ支那國地方官ハ日本領事
 官ト若ハ支那國地方官ノ派出スル官員日本領事官ノ派出スル官員ト立會審判(會同審判)スベク若
 シ支那國審判官ノ判決不條理ナルトキハ日本領事ヨリ重慶關監督ニ照會シテ覆審スベシトシ支
 那國政府ハ便宜ニ依リ立會裁判所(會審衙門)ヲ建設スルヲ得ベク立會裁判所ノ設立前ハ二ノ公
 有地ヲ擇テ會審ノ場所ト爲シ訴訟事件アル毎ニ兩國官員期日ヲ定メ會審スベシトシ若シ支那國
 地方官ヨリ差役ヲ派出シテ居留地ニ赴キ犯罪者ヲ捕縛セントストキハ先ツ逮捕令狀ヲ日本領事
 官ニ移シ領事ノ捺印ヲ請ヒタル上領事ノ派出スル警察官吏ト協同シテ捕縛スベク日本人ハ故意ニ
 支那國犯罪者ヲ隱匿スルヲ得ズ追テ立會裁判所設置ノ後ハ特ニ立會裁判所規則ヲ協議制定スベシ
 トセリ。

二 前記日支間取極ニ依ル會審乃至觀審制度ハ一定ノ居留地内ニ限ラレタルモノナル處英米佛ノ諸國
 ト支那國トノ間ノ條約ニ於テハ(例ヘバ西曆千八百五十八年英支天津條約第十七條、西曆千八百七
 十六年英支芝罘協定第二款第三、西曆千八百五十八年英支天津條約第三十八條、西曆千八百八十八
 年米支通商擴張條約第四條、西曆千八百五十八年佛支天津條約第三十五條)此等條約國人ト支那人
 トノ間ノ混合事件ニ關シ一般ニ會審乃至觀審ヲ認メ而モ右ハ外支双方トモ會審觀審ノ權利ヲ相互的

0368 13-0.1.1.1 a
642

ニ保有スルモノナリシガ慣習上外國官憲ノミガ會審乃至觀審ノ權利ヲ有スル片面的ノモノトナリタ
 ヲ。而シテ右片面的會審乃至觀審ノ權利ニハ我國モ亦日支通商航海條約第三條及第二十五條ノ最惠
 國條款ニ依リ均霑シ得ベキナリ(註二)。

(註一) 間島ニ關スル日支條約(明治四十二年九月四日調印)第四條ニ於テ國門江北地方雜居地内居住ノ韓民ハ清國ノ
 法權ニ服シ清國地方官ノ管轄裁判ニ歸シ清國官憲ハ在韓民ヲ清國民ト同様ニ待遇スベク韓民ハ他一切行政上ノ處分モ
 清國民ト同様スルベク又右韓民ニ關係スル民事刑事一切ノ訴訟事件ハ清國官憲ニ於テ清國ノ法律ヲ按テ之ヲ裁判スベク
 日本領事官又ハ其ノ委任ヲ受ケタル官吏ハ自由ニ法廷ニ立會フコトヲ得ベク但シ人命ニ關スル重案ニ付ハ先テ日本
 國領事官ニ知照スベキモノトシ日本國領事官ニ於テ若シ法律ヲ案セズシテ判斷セル度アルコトヲ認メタルトキハ公正ノ裁
 判時期モハ爲別ニ官吏ヲ派シテ覆審スベキコトヲ清國ニ請求スルヲ得トシ南滿洲及東部内蒙古ニ關スル日支條約(大正
 四年五月二十五日調印)第五條ニ於テ南滿洲及東部内蒙古ニ於ケル日本國臣民ハ例記ニ依リ下附セラルル條約ノ地方官ニ
 提出シ登錄ヲ受ケ又支那國警察法令及課稅ニ服スベク民事刑罰ハ日本國臣民被訴スル場合ニハ日本國領事官ニ於テ又支那
 國臣民被訴タル場合ニハ支那國官吏ニ於テ之ヲ審判シ五ニ員ヲ派シ 隨所傍聽セシムルコトヲ得ベク但シ土地ニ關スル日本
 國臣民及支那國臣民間ノ民事訴訟ハ支那國ノ法律及地方慣習ニ依リ兩國官員各員ヲ派シ 共同審判スベク將來同地方ノ司法制
 度完全ニ改良セラレタルトキハ日本國臣民ニ關スル一切ノ民事訴訟ハ完全ニ支那國法廷ノ審判ニ歸スベシトセリ。

三 會審乃至觀審ノ權利ガ支那國ト諸外國トノ間ノ條約ニ於テ認メラレタルハ前述ノ通りナル處實際
 上會審乃至觀審ノ制度ガ最モ發達シタルハ上海共同租界ニ於ケルモノナトス(註二)。

上海共同租界ニ於ケル會審制度ノ發達ハ起原ハ長髮賊ノ亂ノ時代ニ遡ルモノニシテ即チ長髮賊ノ亂
 ニ當リ其ノ戰禍上海方面ニ及ズシ上海租界内ニ支那人ノ流入スルモノ多キヲ加ヘタルガ租界内ニハ
 當初支那人裁判機關存セザリシヲ以テ英米ノ領事ガ事實上或程度迄租界内支那人犯人ニ對シ裁判權

173
6 1.1.1.0-27 3861

一七四
ヲ行ヒ即チ租界内支那人ノ輕微ナル刑事事件ニ付小額ノ罰金ヲ課シ重大ナル刑事事件ニ付テハ犯人
ヲ租界外支那官憲ニ引渡スヲ例トシタリ。内ニ支那人ノ犯罪ニ付テハ租界内流入夥シク増加スル
然ルニ其ノ後西曆千八百六十年乃至千八百六十一年ノ交ニ及ビ支那人ノ租界内流入夥シク増加スル
ニ及ビ此等租界内支那人ニ對スル特別ノ裁判機關ヲ設置ハ租界ノ安寧及秩序維持上愈々其ノ必要性
ヲ感ゼラルルニ至リタルガ西曆千八百六十四年英國領事「ボトクス」ノ提案ニ依リ初メテ共同租界
内ニ特別ノ支那裁判機關ノ設置ヲ見ルニ至レリ。之レ所謂會審衙門ナルモノニシテ其ノ構成ハ道台
ノ任命セル支那人法官ト條約國領事ノ任命セル外國人會審官「アセッサ」ヨリ成リ而シテ右外國
人會審官「アセッサ」ノ職權ハ初メハ理論上外國人ニ關係アル事件ニノミ限ラレタルモ其ノ後右
會審官「アセッサ」ハ租界内ニ於テ發生シタル一切ノ刑事事件ノ審判ニ參與スルノ權ヲ認ラレ
タリ。
上海領事團ハ共同租界内會審衙門ノ制度ヲ完全且常設的ノモノト爲サントシテ西曆千八百六十六年
北京公使團ニ諮リ佛國公使ヲ除ク爾餘ノ列國公使ノ議ヲ纏メテ西曆千八百六十八年總理衙門ノ承認
ヲ經テ上海洋滙源設官會審章程「」制定ヲ見同章程ハ西曆千八百六十九年八月二十日公布セラレ同
日ヨリ一年ノ後實施セラレタリ。同章程ニ依レバ「」同知知地位ヲ有スル一名ノ官吏ハ租界内ノ
支那人相互間ノ民事事件及支那人ハ被告トスル外支混合民事事件ハ支那法規ニ依リ裁判シ又支那人

1865-643-0.1.1.1.2

一七五
ヲ訊問シ拘留シ首枷ノ刑又ハ管刑其ノ他輕微ノ刑ヲ以テ處罰スルノ權限ヲ有ス「」外國人ガ關係ヲ
有スル訴訟事件ノ審判ニハ領事又ハ其ノ代理者ガ同知同席スルモノトス但シ支那人ノミ關係ヲ有
スル場合ニハ同知ハ獨立シテ裁判ヲ爲スベク領事ハ之ニ干渉スルヲ得ズ「」被告ガ外國人ニ使用セ
ラル支那人ナル場合ニハ同知ハ先ツ其ノ事件ノ詳細ヲ當該國領事ニ通知ス領事ハ當事者ヲ庇護シ
又ハ隱蔽セシテ之ヲ裁判所ニ送致スルノ義務アルモノトス領事又ハ其ノ代理者ハ審理ニ出席スル
コトヲ得但シ外國利益ノ關係ナキモノナルトキハ干渉スルコトヲ得ズ「」死刑及各種追放刑ニ該ル
一定ノ重罪事件ニ付テハ衙門ニ於テ管轄ノ權能ナク其ノ訴追ハ上海縣承審員ニ於テ之ヲ爲ス「」檢
屍ハ上海縣承審員ニ於テ之ヲ爲ス「」外支混合事件ノ裁判ニ付當事者ノ一方ニ於テ判決ニ不服アル
場合ニハ道臺又ハ關係領事ニ新ナル審理ヲ請求スルコトヲ得ルモノトス。
西曆千九百十一年支那革命ノ亂ハ會審衙門ノ地位ニ重大ナル變革ヲ齎シタリ。即チ革命軍上海ニ入
リテ知縣等清朝官憲ヲ逃亡スルヤ上海領事團ハ先ツ會審衙門ニ對スル管理ヲ其ノ掌中ニ收メ西曆千
九百十一年十二月十一日附ヲ以テ「」會審衙門及其ノ附屬監獄ハ各國領事指導ノ下ニ從來通其ノ
職務ヲ執行スル「」劉道臺ノ十一月二日附ヲ以テ任命シタル關炯、王嘉熙及孫宗義ハ正式ノ裁判官
トシテ承認セラレ「」工部局警察ヲシテ附屬監獄ヲ監視セシム「」會審衙門ノ召喚狀、逮捕狀及命
令書ハ從前通ノ手續ヲ踐ミ工部局警察ヲシテ之ヲ送達及ハ執行セシム「」租界内居住支那人ノ權利

S 1.1.1.0 - 27 3862

ハ今次ノ擾亂ニ依リ何等影響ヲ受クルコトナシ(ハ)租界内支那人ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ革命團ヘノ加入又ハ之ニ對スル密附ヲ強要スル者ハ之ヲ逮捕處罰スルコトノ趣旨ノ告示ヲ發シタリ。

領事團ハ會審衙門ニ對スル管理ヲ其ノ掌中ニ收メタル後會審衙門ノ制度ニ對シ數多ノ改正ヲ加ヘタリ。例(イ)支那人法官ノ就任ニハ領事團ノ承認ヲ受クルヲ要シ且其ノ職務ノ執行ニ付テハ外國人會審官ノ指導ヲ受クルノ慣行ヲ確立シタルコト(ロ)會審衙門ノ附屬監獄ヲ工部局警察ノ管理ニ移シタルコト(ハ)會審衙門ノ裁判ノ執行、召喚狀及逮捕狀等ノ執行ヲ工部局警察ニ移シタルコト(ニ)檢屍ノ事務ヲ知縣ヨリ公解長ノ權限ニ移シタルコト(ホ)刑事事件ニ付刑期五年以下ニ非ザレバ會審衙門ニ於テ裁判權ナシトセラレタル制限ヲ撤廢シ夫レ以上ノ事件ニテモ衙門ニテ之ヲ裁判スルコトトシ知縣ニ移送スルノ舊制ヲ廢止シタルコト(ヘ)衙門ノ會計監督ノ權ヲ工部局ニ與ヘタルコト(ト)支那人法官ノ俸給ヲ領事團ニ於テ保管スル道臺ノ官有財産ヨリ支給スルコトト爲シタルコト(チ)支那人相互間ノ民事事件ニモ外國人會審官ヲ出席セシムルコトトシ且外國人會審官ヲ關係國人ヨリ選出スルコトト爲シタルコト(リ)辯護士ノ出廷ヲ許可シタルコト等ノ如シ。而シテ右ノ如キ制度上ノ改正ハ實質的ニハ西曆千八百六十九年ノ「上海洋涇濱設官會審章程」ヲ修正スルモノナルコト言フ俟タズ。

支那政府ハ革命終結後領事團管理ノ會審衙門ヲ回收センコトヲ要求シ列國トノ間ニ交渉ヲ重ネタル

ガ西曆千九百二十六年八月三十一日附ヲ以テ會審衙門還付ニ關スル協定成立シ(日)米、英、瑞、丹、佛、葡、西、葡、西、墨ノ代表者署名)右協定ハ翌年一月一日ヨリ實施セラレタリ。右還付協定ニ依リ(イ)會審衙門ニ代フルニ上海臨時法院ヲ設置スルモノトス(ロ)共同租界ノ平和及秩序ニ直接關係アル刑事事件及治外法權國人ノ使用人ガ被害タル一切ノ刑事事件ニ於テハ首席領事ハ訴訟手續ヲ監視セシムル爲メ陪席スル「デビニテ」ヲ任命スルコトヲ得。而シテ右「デビニテ」ハ贊同ハ判決ノ效力ノ要件ニテラザルモ「デビニテ」ハ反對意見ヲ記錄ニ留ムルコトヲ得。又「デビニテ」ハ判事ノ許可ナクシテ證人及犯人ノ訊問ヲ行フコトヲ得ズ(ハ)治外法權國人又ハ上海共同租界工部局ガ原告タル民事事件及治外法權國人ガ被害者タル刑事事件ニ於テハ關係國領事又ハ首席領事ハ條約規定ニ從ヒ判事ト陪席スベキ「オフィシャル」ヲ派遣スルコトヲ得(ニ)共同租界ノ平和及秩序ニ直接關係アル刑事事件及混合刑事事件ヲ處理スル爲メ控訴院ヲ設置スルモノトス臨時法院長ハ控訴院長ヲ兼任スベキモノトス原審審理ニ首席領事ノ任命セル「デビニテ」ガ陪席シタル一切ノ事件ノ控訴審ニハ首席領事ノ任命セル他ノ「デビニテ」ガ陪席シ又混合刑事事件ノ控訴審ニハ同様關係國領事ノ派遣スル他ノ「オフィシャル」ガ陪席スルモノトス(ホ)臨時法院ノ院長及判事並ニ控訴院ノ判事ハ江蘇省政府ニ依リ任命セラルモノトス(ヘ)十年以上ノ監禁及死刑ニ該ル事件ニ付テハ臨時法院ハ認可ヲ求ムル爲メ事件ヲ江蘇省政府ニ報告スベキモノトス江蘇省政府ガ認可ヲ與ヘザ

S 1.1.1.0 - 27 3863

644

ル事件ニ付テハ同政府ハ其ノ理由ヲ示シ臨時法院ヲシテ事件ヲ再審セシメタル上其ノ再審ノ判決ヲ再ビ省政府ニ提出セシムベキモノトス死刑ノ執行ハ租界外ノ支那官憲ニ於テ之ヲ爲ス。檢屍ハ法院ノ判事及首席領事ノ指命シタル「デビュティ」ト共同シテ之ヲ行フベキモノトス。(ト) 法院附屬ノ監獄(民事拘留所及女囚監獄ヲ除ク)ハ工部局警察ノ管理ノ下ニ置クモノトス。(チ) 法院ノ發布スル召喚狀、逮捕狀及命令書ハ總テ工部局警察部ノ司法警察ニ於テ之ヲ送達又ハ執行スルモノトス。(リ) 法院ノ財務及共同委員會ノ決定スル法院ノ行政事務ハ首席領事ガ推薦シ江蘇省政府ガ任命シタル「チ」ラ・クラウクニ任スベキモノトス。(ニ) 前記會審衙門遺付協定ハ實施ノ日(西曆千九百二十七年一月一日)ヨリ三年間效力ヲ有スベク而シテ右三年ノ期間滿了前六月ノ豫告ヲ以テ改正ヲ提出シ得ルコトナリ居タルガ西曆千九百二十九年ノ交ヨリ改正交渉行ハレ西曆千九百三十年二月十七日附ヲ以テ所謂特區法院ニ關スル協定成立シ(伯、米、英、諸國、佛、支ノ代表者署名シ日本ハ參加セズ)該協定ハ同年四月一日ヨリ實施セラレタリ。右特區法院協定ニ依レバ(イ) 上海共同租界ニ於ケル支那國裁判所ノ設置ニ特別ノ關係ヲ有スル一切ノ舊規則、協定、交換公文等ハ本協定實施ノ日ヨリ廢止セラレベシ。(ロ) 支那國ハ司法制度ニ關スル支那國ノ法令及規則ニ依リ且本協定ノ規定ニ從ヒ共同租界ニ地方法院及高等法院分院ヲ設置スベシ。(ハ) 高等法院分院ノ判決ハ決定及命令ハ支那國最高法院ニ上告スルコトヲ得。(ニ) 觀審又ハ

645

會審スル爲首席領事ノ指令スル「デビュティ」又ハ領事ヲ派遣スル「オフ」シタルガ出廷スルノ舊習ハ本協定ニ基キ設置セラレタル法院ニ於テ廢止セラレベシ。(ホ) 工部局警察又ハ法院ノ司法警察ニ依リ逮捕セラレタル者ハ休日ヲ除キ二十四時間内ニ法院ニ送致セラレベク然ラザルトキハ釋放セラレベシ。(ヘ) 支那國政府ニ依リ任命セラレタル檢察官ハ檢屍ヲ爲シ工部局警察又ハ關係當事者ガ既ニ訴追ヲ爲シタル場合ノ外ハ支那國刑法第三百條乃至第八十六條ノ適用ヲ合ム一切ノ事件ニ付其ノ職權ヲ行フモノトス。法院ノ管轄内ニ發生スル他ノ事件ニ於テハ工部局警察又ハ關係當時者訴追スベシ。(ト) 召喚狀、逮捕狀、命令書等ノ如キ訴訟書類ハ法院ノ司法警察ニ依リ又ハ法院ノ執達吏ニ依リ送達又ハ執行セラレハシ法院ノ司法警察官又ハ工部局ノ推薦ニ基キ高等法院分院長ニ依リ任命セラレベシ。(チ) 法院附屬ノ民事拘留所及女囚監獄ハ支那國官憲ニ依リ監督管理セラレベシ。(リ) 外國人辯護士ハ外國人ガ當事者タル事件ニ付出廷ヲ許サルベシ但シ外國人辯護士ハ當該外國人當事者ノミヲ代理シ得ルモノトス。工部局ニ於テ租界ノ利益ガ包含セラレタル事件ニ付テハ同局ハ其ノ代理トシテ辯護士ヲ出廷セシメテ意見ヲ述ベシムルコトヲ得ルモノトス尙前記西曆千九百三十年ノ協定ハ其ノ後其ノ效力ヲ延長セラレ現在ニ及ベリ。

(註三) 會審衙門遺付協定ニ於テ廢止スルべき會審制度ノ設置アリ又上海ニ於テハ共同租界ニ於ケル共ニ佛租界ニ於テモ會審制度ノ設置ヲ見タリ。

3864

四 現在ニ於テハ會審乃至觀審制度ハ各地トモ實際上ハ殆ンド有名無實トナリタル觀アルモ支那法廷ノ管轄スル外國人關係ノ事件ニ付外國官憲方立會ヲ爲シ其ノ裁判ニ干與スルノ眞ノ必要性ハ必ジモ減シタルモノト言フコトヲ得ズ。

第四款 領事裁判權以外ノ治外法權ノ内容

一 領事裁判權ガ所謂治外法權ノ本來ノ内容ヲ爲スモノナルコトハ明瞭ナルモ領事裁判權以外ニ於テ所謂治外法權ハ如何ナルモノヲ包含スルヤ其ノ範圍ヲ確定スルコトハ極メテ困難ナル問題ニシテ此ノ點ハ治外法權研究家ノ最モ當惑スル處ナリ。蓋シ領事裁判權以外ニ於テ所謂治外法權ノ内容ヲ構成スルモノハ條約上ノ規定ヨリモ專ラ實際上ノ慣習ニ根據スルモノ多ク又條約上規定スル所ト雖モ其ノ範圍等必シモ明瞭ナラザル點尠カラズ。

二 所謂治外法權ノ内容ニ關シ從來治外法權國側ハ極メテ廣義ノ解釋ヲトリ支那側ハ成ルベク狹義ニ解釋スルノ傾向アリ。然レドモ支那ニ於ケル所謂治外法權ハ領事裁判權以外ノ事項ヲモ包含スルモノナラコトハ之ヲ否認スルニ由ナク唯問題ハ如何ナル範圍マデ及ブヤノ點ナリトス。或ハ佛支天津條約第四十條「Il est d'ailleurs entendu que toute obligation non consignée expressément dans le présente Convention ne saurait être imposée aux consuls ou aux agents consulaires non plus qu'à leurs nationaux」トアルヲ根據トシテ(佛國以外ノ治外法權國)

最惠國條款ニ依リ)治外法權國人ハ條約上別段ノ規定ナキ限り支那國ノ一切ノ行政權乃至統治權ニ服從セザルノ特權ヲ有スト爲スノ說アリ。而シテ右說ノ當否ニ付テハ疑問ノ餘地ナキニ非ズト雖モ右規定モ亦一ノ根據トナリテ支那ニ於テハ治外法權國人ハ裁判權以外ニ於テモ可ナリ廣範圍ニ互リテ支那ノ管轄權ニ服セザルノ特權ヲ生ズルニ至レルコトハ之ヲ否認スルヲ得ズ。

三 佛支天津條約第四十條及自支北京條約第十四條等ノ規定(右規定ニ對スル最惠國條款ニ依ル均當)並ニ慣習ニ據リ日本國臣民ハ他ノ治外法權國人ト同様條約上別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外原則トシテ支那ノ課稅權ニ服從セザルノ特權アルコトハ今日一般ニ認メラルル所ナリ。而シテ今日日支間條約上支那側ニ於テ日本人又ハ日本貨物ニ對シ課稅ノ權利アルコトヲ規定セルモノハ輸出關稅、戻稅、通過稅、噸稅(昭和五年五月六日締結日支關稅協定第一條)支那ニ於テ日本人ノ製造セル物品ニ對スル課稅(明治二十九年十月十九日調印ノ日支間議定書第三條)但シ本課稅ニ付テハ他ノ條約規定トノ關係上適用ニ付議論アリ)抵代稅(日支通商條約第十一條)昭和四年支那輸入稅率ノ改訂増額承認ノ際ノ交換公文)支那ガ各條約國ト協議決定スベキ取極ニ依ル生産稅消費稅機械製造品稅內國產鴉片及鹽ノ稅(日支追加通商條約第一條)內地水路沿岸ニ於ケル倉庫及埠頭ニ對スル諸稅及賦課(日支追加通商條約附屬追加內地水路汽船航通規則第三條)杭州居留地內地稅(杭州日本居留地取極書第五條)杭州日本居留地追加取極書第三條)蘇州居留地內地稅(蘇州日本居留地取極書第五條)

漢口居留地内地税(漢口日本居留地取極書第三項)沙市居留地内地税(沙市日本居留地章程第四條第二項)天津居留地内地税(天津日本居留地取極書第十二條)福州居留地内地税(福州日本專管居留地取極書第五條)厦門居留地内地税(厦門日本專管居留地追加取極書第四條)重慶居留地内地税(重慶日本專管居留地取極書第六條)上海共同租界内地税(上海共同租界土地章程第八條)厦門共同租界内地税及前濱税(厦門共同租界土地章程第十三條)黃浦江水路税(黃浦江水路改良ニ關スル追加假協定第四條)第三條(三)淄川坊子及金嶺鎮ノ嶺山經營ノ日支合辦會社ニ對スル礦區稅礦產稅(山東懸案細目協定附屬書第九ノ六)等ナリトス(註一)(註二)(註三)(註四)

(註一)支那側ニ於テ今日迄日本人其ノ他ノ治外法權國人ニ對シテ他條約上明瞭ニ認メラレタルモノ以外ニ於テ課稅權ヲ主張シ又ハ納稅ノ要求ヲ爲シタルモノ極メテ多ク所謂不當課稅問題トシテ外交交渉ノ問題ト成リタル事例枚舉ニ違ナシ。而シテ條約ニ明定セザル支那側課稅中ニハ當時者ニ於テ寄附金等ノ名義ヲ以テ事實上納稅スルチ我方ニ於テ承認セルモノナキニアラズ。

(註二)大正四年五月二十五日調印ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ニ於テハ南滿洲ニ於ケル内地開放及東部內蒙古ニ於ケル農工業ノ日支合辦經營ヲ認ムルト共ニ支那側ノ課稅權ヲ認メタリ(第五條及附屬交換公文)。

(註三)支那國ニ於ケル日本國臣民ハ他ノ治外法權國人ト同様一般ニ支那國ノ警察權ノ干渉ヲ受ケザルノ特權アリト認メラル。其ノ根據ハ主トシテ多年ノ慣習ニ之ヲ求ムルヲ得ベシト雖モ條約上ノ根據モ亦絶無ナリト言フベカラズ。蓋シ前記佛支天津條約第四十條ノ規定ノ解釋ノ外南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約第五條及同條ニ關スル交換公文ノ反對解釋等ヨリスルモ日本國臣民ガ一般ニ支那國ノ

警察權ニ服セザルモノナルコトヲ論結スルヲ得ベキナリ(註三)。

(註三)大正四年五月二十五日調印ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ニ於テ南滿洲ニ於ケル内地開放及東部內蒙古ニ於ケル農工業ノ日支合辦經營ヲ認ムルト共ニ日本國臣民ノ支那國警察法令ヘノ服從ヲ認メ而シテ右ニ關スル交換公文ニ於テ右警察法令ハ豫メ支那國官憲ニ於テ日本國領事官ト協議ノ上施行スベキモノトセリ。

五 課稅及警察以外ノ行政權ノ關係ニ付テモ從來治外法權國側ノ所謂治外法權ノ範圍ヲ成ルベク廣ク解スルノ傾キアラフト前述ノ通ナル處前記課稅ニ關スルモノノ外條約上明カニ治外法權國人ガ支那國ノ管轄權ニ服スベキコトヲ定メタルモノナシトセズ(註四)。

(註四)日支通商航海條約第五條第二項ハ「清國ノ諸開港及諸立寄港以外ノ港ニ不法ニ進入シ若ハ沿海及河筋ニ於テ密商ニ從事スル船舶ハ其ノ積荷ト共ニ清國政府ニ於テ之ヲ沒收スベキモノトス」トシ同條約第六條中ニ於テ「日本國臣民旅券ヲ携帯セズシテ内地ニ旅行シタルトキハ三百弗ヲ超過セザル罰金ニ處スベシトシ(但シ罰金ヲ課スル權限アル者ハ日支何レノ官憲ナリヤ明示セズ)同條約第八條ニ於テ日本臣民ガ荷物又ハ旅客運搬ノ爲メ賃借スル艇隻ニ關シ「右艇隻ヲ以テ密商ニ從事スルモノハ法ニ照シテ之ヲ處罰スベシトシ(但シ處罰ノ權限アル者ハ日支何レノ官憲ナリヤ明示セズ)同條約第十八條ニ於テ「諸開港地ニ於ケル清國官吏ハ密商ノ爲メ收入ニ減少ヲ來サザル様其ノ必要アリト認ムル措置ヲ施スベシトシ

日支追加通商航海條約附屬第一號追加内地水路汽船航運規則第六項ニ於テ「登錄汽船及其ノ出船ノ禁制品(武器、麻薬等)ノ輸送ヲ禁止シ」ト本規定ニ背キタルトキハ此ノ種違反ニ關シ條約ニ規定セル罰金課シ且該船ノ攜帶スル内地水路航行證ヲ取消スルヲ禁ズ」トシ該船ハ爾後内地航行ヲ禁止セラルベシトセリ。

六 支那國ニ於ケル治外法權ハ領事裁判權ノ外行政權ノ關係ニ於テモ廣キ範圍ニ於テ認メララルモノナルコトヲ前述ノ通ニシテ其ノ結果治外法權國ハ支那國領域内ニ在ル自國人ニ對シ其ノ行政權ヲ行使スルコトナレリ。而シテ治外法權國ノ支那國在留自國人ニ對スル行政權行使ノ方法及範圍等ハ國

一八三

ニ依リ異ナレモ我國ハ支那國在留民ノ數他國ニ比シ最モ多ク之ニ對スル保護取締ノ必要上行政權行使ノ程度モ他國ニ比シ廣汎ニ互レリ。

在支邦人ニ對スル行政事務ハ在支帝國領事官ノ職務中最モ重要ナルモノノ一ナルガ帝國領事官ノ行政事務ノ法的根據ハ領事官ノ職務ニ關スル法律(明治三十二年法律第七十號)領事官職務規則(明治三十三年勅令第五十三號)支那國在留帝國臣民取締法(明治二十九年法律第八十號)居留民團法(明治三十八年法律第四十一號)其ノ他各種ノ法令ニ在リ。尙在支帝國領事官ハ職務規則ニ基キ其ノ所轄事務ニ付命令即チ所謂領事官令ヲ發スルコトヲ得ルモノニシテ領事官令ニハ五十圓以內ノ罰金若ハ科料又ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得ルモノトセラル。

第四節 支那國ニ於ケル治外法權撤廢問題ノ經緯

一 英國ハ西曆千九百二年英支通商條約即チ所謂「マツケ」條約第十二條ニ於テ又米國ハ西曆千九百三年ノ米支通商關係擴張ニ關スル條約第十五條ニ於テ夫々治外法權ノ將來ノ撤廢ヲ豫約シタルガ日本モ亦明治三十六年(西曆千九百三年)日支追加通商航海條約第十一條ニ於テ「清國政府ハ其ノ司法制度ヲ改正シテ日本國及西洋各國ノ制度ニ適合セシムルコトヲ熱望スルヲ以テ日本國ハ右改正ニ對シ一切ノ援助ヲ與フヘキコトヲ約シ且清國ノ法律ノ狀態其ノ施行ノ設備其ノ他ノ要件ニシテ日本國ガ満足ヲ表スルトキハ其ノ治外法權ヲ撤去スルニ躊躇セサルヘシ」ト約シ又其ノ後大正四年

南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約第五條ニ於テ「將來同地方ノ司法制度完全ニ改良セラルトキハ日本國臣民ニ關スル一切ノ民刑訴訟ハ完全ニ支那國法廷ノ審判ニ歸スヘシ」ト約シタリ(註二)

(註一) 大正四年南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約第五條第一項ニ於テ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル限リ日本國臣民ハ支那國警察法令及課税ニ服スベキ旨ヲ定ムルト共ニ附屬交換公文ヲ以テ右日本國臣民ノ服從スベキ警察法令及課税ハ豫メ支那國官憲ニ於テ日本國領事官ト協議ノ上施行スベキ旨ヲ定メタリ。右ハ所謂治外法權ノ一部撤廢ヲ意味スルモノナルコト言テ俟タズ。

二 支那國ハ大正六年(西曆千九百十七年)獨、澳兩國ニ對シ宣戰ノ結果兩國ノ有セシ治外法權ヲ事實上回收シ次テ獨國トハ大正十年(西曆千九百二十一年)五月二十日ノ通商協定附屬宣言及同協定

第三條ニ依リ澳國トハ大正十四年(西曆千九百二十五年)十月十九日ノ通商條約ニ依リ何レモ正式ニ兩國ノ領事裁判權ヲ回收セリ。又支那國ハ露國革命後大正九年(西曆千九百二十年)九月二十三

日ノ駐支露國公使及領事ノ資格承認停止ニ關スル大總統令ニ依リ事實上在支露西亞人ヲ悉ク支那國ノ法權ノ下ニ置クコトト爲シタルガ其ノ後大正十三年(西曆千九百二十四年)五月三十一日「ソ

ヴイェト」聯邦支那國間國交回復ニ關スル協定第十二條ニ於テ「ソヴイェト」聯邦ハ治外法權及領事裁判權ヲ拋棄スルコトヲ約シタリ。

三 支那國ハ大正八年(西曆千九百十九年)ノ巴里平和會議ニ於テ治外法權撤廢ヲ主張シ又大正十一年(千九百二十二年)開催ノ華府會議ニ於テモ同様ノ主張ヲ繰返シタルガ華府會議關係九ヶ國ハ支

6 1.1.1.0 3867

648 0.1.1.0 2

那ニ於ケル治外法權ニ關スル決議ヲ以テ委員會ヲ組織スルコトナリ右委員會ハ一九二六年開催セ
ラレ日本ヲ初メ十三ヶ國ノ治外法權國ノ委員及支那國委員北京ニ會合シ報告書ヲ作成セリ右報告書
ハ支那國ノ法制並ニ司法及監獄ノ制度ノ改良等ニ關スル勸告事項ヲ掲グ右勸告事項ガ相當ニ實行セ
ラルルニ至ラバ諸國ニ於テ其ノ各自ノ治外法權ニ關スル權利ヲ拋棄シ得ベキモノト認ムルコトヲ記
載セリ(註二〇)

一八六

(註二〇) 本報告書ニ於テ勸告事項ノ全部ガ相當ニ實行セラルル時期前ニ在リテ其ノ主要ナル事項ニシテ實行セラルル後
ハ關係國ハ支那國政府ガ承認スルニ於テ其ノ際協定セラルベキ漸進的計畫(地理的、部分的又ハ其ノ他ノ)ニ從ヒ治外法權
ノ撤廢ヲ考慮スルベシトシ又治外法權ノ撤廢ニ至ル迄關係國政府ハ本報告書第一節附載ノ意見ニ通照スル目的
ヲ以テ右第一節ニ付考慮スベキ且治外法權ノ現在ノ制度及行使ニ對シ必要アリハ支那國政府ノ協力ヲ得テ支那國法規ヲ適
用、混合事件及會審衙門、治外法權人民ノ取扱、司法上ノ協力、課税等ニ關シ一定ノ變更ヲ加フベシトセリ。

四 昭和三年國民政府出現以來國權回復ノ運動益々熾烈トナリ治外法權國ニ對シ全面的ニ撤廢交渉ヲ
開始スルニ方昭和四年十二月二十八日附命令ヲ以テ昭和五年以降從來領事裁判權ヲ享有セシ外國人
モ一律支那國法令ヲ遵守スベシト聲明シ又引續キ行ハレ居リ列國トハ交渉中ニ於テ昭和六年五月
四日附ヲ以テ管轄在華外國人實施條例ナルモノヲ發布シ「東省特別區、奉天、天津、青島、上海、
漢口、重慶、福州、廣東及雲南ノ地方法院並ニ其ノ關係高等法院內ニ特別法廷ヲ設ケテ外國人ヲ被
告トスル民刑訴訟案件ヲ受理スル」トシ一方の法權撤廢ノ態度ニ出デタルモ治外法權國ハ固ヨリ之ニ

取リ合ハズ撤廢交渉繼續セルモ其ノ後滿洲事變勃發等ニ伴ヒ支那ノ治外法權撤廢問題ハ立消トナリ
タリ。尤モ國民政府ガ昭和三年以來白、伊、丁、葡、西ノ諸國政府ト締結セル新條約ニ於テ昭和五
年(西曆千九百三十年)一月一日ヲ以テ治外法權ヲ撤廢スベキ旨約セン處右條約ノ附屬書ノ規定ニ
依リ伊、丁、葡、西ノ諸國ニ付テハ支那國ガ治外法權撤廢ニ付華府條約署名國全部ト協定ヲ締結シ
タル後定ムベキ日迄又白國ニ付テハ治外法權國ノ過半数ガ之ニ同意スル迄延期スベキ旨ヲ定メタ
リ(註二一)。

(註二一) 國民政府トノ交渉ニ於テ日、英、米、佛等ノ主要列國ハ何レモ地方別及事項別ニ依リ漸進的撤廢ヲ主張シ支那側ノ希
望タル即時撤廢ニ賛成セズ雙方ノ主張當ニ對立シタリ。

五 前記國民政府トノ治外法權撤廢交渉ニ於テ我國ハ(イ)治外法權ノ撤廢ハ漸進的方法ニ依ルベキコ
ト(ロ)治外法權ノ撤廢ニ應ジ生命財產ノ安全ヲ保障スルニ足ルベキ方法ヲ講ズベキコト(ハ)治外法
權ノ撤廢ト共ニ内地開放ヲ行フベキコト(ニ)治外法權ニ關シ最惠國待遇ヲ與フベキコト等ヲ骨子ト
スル交渉基礎案ヲ決定シ支那側ト交渉シタル處支那側ハ飽ク迄治外法權ノ完全且即時撤廢ヲ要求シ
之ニ應ゼザルニ於テハ交渉ノ餘地ナシトノ態度ヲ表明シ爲ニ交渉ノ進行捗シカラザル間ニ前記ノ如
ク滿洲事變ノ勃發等ヲ見爾來治外法權撤廢ノ交渉ハ斷絶スルニ至レリ。

一八七

S. 1.1.1.0 - 27 3868

649